

aaca 景観シンポジウム

2020 東京オリンピック・パラリンピックと都市景観

aaca
日本建築美術工芸協会
2015-別冊2



日時 2017年7月3日 15時～17時30分
場所 パナソニック汐留ビル イベント・ホール

第1部 講演
今村創平氏 千葉工業大学准教授
齋藤公男氏 日本大学名誉教授

第2部 パネル・ディスカッション
モデレーター 今村創平氏、齋藤公男氏
パネリスト
彦根茂氏 アラップ・ジャパン特別顧問
福島七郎氏 東京オリンピック・パラリンピック
競技大会組織委員会会場整備局長
中分毅氏 日建設計副社長

主催：一般社団法人 日本建築美術工芸協会

後援：(一社)日本建築学会 (公社)日本建築家協会 (公社)日本建築士会連合会 (一社)日本建築士事務所協会連合会 (一社)日本インテリアプランナー協会 (一社)日本美術家連盟 (公財)日本美術協会

司会(佐藤) 本日は一般社団法人日本建築美術工芸協会が主催する2015年 aaca 景観シンポジウムへお越しいただき、誠にありがとうございます。ただいまより「2020 東京オリンピック・パラリンピックと都市景観」を開演いたします。私は司会の進行を務めます、協会理事の佐藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

お手元のプログラムにもございますが、本日のシンポジウムは講演とパネル・ディスカッションとの2部構成となっております。2時間半ほどの間ではございますが、どうぞゆっくりお楽しみいただければと思います。

はじめに、日本建築美術工芸協会会長・岡本賢より、皆さまにご挨拶申し上げます。



岡本 皆さま、こんにちは。足元の大変悪い中、aaca 景観シンポジウムに多数お集まりいただき、本当にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

日本建築美術工芸協会は、故芦原義信先生が創立されました協会で、建築とアートに関わるさまざまな分野の方たちが集まり、芦原先生の理念であります、よりよい都市景観、かつ生活環境を創造することを目標にさまざまな活動をしてまいります。

2つの大きな事業をいま展開しています。1つは、毎年優れた建築及び美術作品を表彰する aaca 賞で、全国の優れた建築作品や美術作品を表彰してまいりま

した。もう1つは景観シンポジウムで、毎年開催しています。これはその時々最新の情報、特に都市景観に関わるさまざまな情報を多くの皆さま方に知っていただきたいということで、開催しております。

本日は、いま話題のオリンピック・パラリンピックがテーマですが、これを契機として都市環境、都市景観が大きく変化する、激変することがよくあります。1964年の東京オリンピックには、高速道路ができて都市景観が激変しました。他の都市でも同じように、いろいろなスタジアム等により、都市景観が変化している事例がたくさんあります。そういった他都市の事例、外国の事例等を齋藤先生、今村先生からお話いただき、オリンピックをきっかけに、いかに都市景観に大きなインパクトがあるかということをお知らせいただきたいと思います。

それから、ロンドンオリンピックに大きく関わっておられた彦根先生から、ロンドンオリンピックから東京オリンピックにいろいろなメッセージがあるのではないかと、さらにいま最も多忙でいらっしゃる組織委員会の整備局長の福島先生に、2020年東京オリンピック・パラリンピックの目指すものをつぶさにお話しいただきたいと思います。最後に、東京でさまざまなプロジェクト、多くのプロジェクトを展開しておられる日建設計副社長の中分先生から、2020年後にどのように東京が変わっていくかについて、興味深いお話がいただけるのではないかと考えています。

どうぞ皆さま方には、このひとときを有意義に過ごしていただければと思います。日本建築美術工芸協会では毎月のようにさまざまな形で、シンポジウムとは

限りませんが、いろいろなフォーラム、セミナー等を行って情報発信をしまいいりました。これからもさまざまな展開をしていきたいと考えておりますので、どうぞ引き続き当協会にご支援賜りたく、よろしく願いしたいと思います。

最後に、この会場を提供いただきましたパナソニック様に心から厚く御礼申し上げます。本日はどうもありがとうございました。（拍手）



司会 岡本会長、ありがとうございました。

それでは、2015年 aaca 景観シンポジウム第1部講演「スタジアムと都市景観」を始めたいと思います。

第1部のご講演者には日本大学名誉教授・斎藤公男先生と千葉工業大学准教授・今村創平先生のお2人をお招きしております。今村創平先生からの講演で始めさせていただきます。まず、今村先生の略歴をご紹介します。

今村創平先生は1966年のお生まれで、早稲田大学ご卒業ののち、英国建築家協会建築学校（通称AAスクール）と、長谷川逸子・建築計画工房を経て2002年独立。設計事務所アトリエ・イマムを主宰されながら、現在、千葉工業大学建築都市環境学科准教授他、多数の教育機関で教鞭を執られています。執筆も多数行われ、日本建築家協会機関誌『JIA MAGAZINE』編集長も務めておられます。

それでは今村先生、よろしくお願いいたします。



今村 本日は2部のほうで皆さんが関心をお持ちの2020年オリンピックの話が具体的に出てきますが、1部は斎藤先生と私が担当です。

第2部の前段としてスタジアムのあり方、都市における大型施設のあり方を、議論の先駆けとして紹介させてもらえればと思います。

〔スライド〕私が用意したタイトルは「都市における大規模集約施設の系譜」です。少し硬い書き方ですが、具体的にどういうことかということ、長い歴史の中で人々が集まって都市をつくります。そして都市の中に大規模な人が集まる施設が誕生しますが、それはなぜ誕生するのか、なぜ必要とされるのかを1回きちんと見てみようという発想からのものです。

いまの我々の感覚からすると、例えば東京でも何万人集まる施設、ヨーロッパの都市でも何万人集まる施設があって当たり前前と思いますが、人類の歴史を見て

みると、実はそうではないことがわかります。

〔スライド〕始まりはギリシャであり、建築史で習う建築のルーツとも重なりますが、ギリシャで民主主義というものが起き、デモクラシー、市民が集まるための場所というものが必要になりました。見ていただいているのはパルテノンのあるアクロポリスです。その向こう側にアゴラという市民が集まる広場があり、手前にシアターがありました。もう1つの写真では、ここにすでに競技場があります。古代のオリンピックの施設です。

〔スライド〕アゴラがあり、ここに市民が自由に集まる広場がある。これは何も無いような場所です。一方ではパルテノン神殿、我々は建築史では普通こちらを勉強しますが、そのすぐ足元には劇場が2つあります。こういったものは市民が集まる都市施設であり、繰り返しますが、それはギリシャで始まりました。当時は恐らく政治的集会もあれば、演劇、音楽会といったことに使われていました。ただ、ギリシャのときは、こういうものが都市施設ではありますが、地形を生かしてつられており、まだ単独の構造物としてつくることはできていない時期です。

〔スライド〕ギリシャにはすでに先ほど言いましたように、オリンピックの先駆けのようなスタジアムがあります。これがイタリア、ローマに行くと、有名なコロシウムが出てきます。いわゆる建造物として巨大な集客施設が都市のど真ん中にできて、しかもこれが今日の主題の景観になるわけです。これだけの大きな施設で闘技などが行われます。この場合、効率よく客席を配置するために扇型に構造をつくり、それがそのまま建物の形にも表れています。



ただ、一方では外観は、後日のルネサンスにつながるような、都市に対するファサードをつくっています。構造物の形がそのまま出ているわけではありません。先ほどのギリシャと比較すると、ローマでは巨大な構造物をつくるのが可能になったことも大きいです。

〔スライド〕1つ付加的なエピソードですが、実はコロシウムには可変式の屋根がかかっていたと言われ

ています。今まさに国立競技場で話題になっていますが、実はコロシウムにも可変式の屋根があったと文献にあります。ローマ人は円形競技場をヨーロッパの各地につくります。これも今日の話のレガシーに関わりますが、ローマの時代はこういう施設を必要としていましたが、時代が変わると必要がなくなります。

コロシウムは 16 世紀の集合住宅にする案、教会にする案と、いろいろな改修案が作られました。ヨーロッパ各地では、例えばフィレンツェでは完全に都市に溶け込んでいます。これはヴェローナだと思いますが、今でも使われている場所もあります。

〔スライド〕ローマでは大きな屋外スポーツ施設が作られ、そのかたちが今でもそのまま原っぱとして残っているものもあります。また別の場所では、広場として競技場の形がそのまま都市の構造に組み込まれている場所もあります。ローマではほかに、巨大構築物としては共同浴場が挙げられます。

都市になぜ人が集まるか。影響が大きいのはやはり宗教です。ギリシャ、ローマの初期には宗教建築はそれほど重要ではなかったのですが、キリスト教では人が集まる教会は必須の施設であり、大規模な空間としては例えばサン・ピエトロ寺院前の広場があげられます。サン・ピエトロ寺院そのものも巨大な建物として知られていますが、その前にとても大きな広場があります。ふだんはパラパラとしか人がいませんが、何かイベントがあると何万人もの人が集まり全部埋まるという都市機能を持っています。

〔スライド〕我々にはあまり馴染みがないですが、さらにすごいのはイスラム教で、メッカには真ん中の黒いオブジェの周りに人が集まります。さらにその周りにも何重にもひとが取り囲み、一度に数百万人もの人が集まるのだそうです。おそらく、世界で最も多く人が集まる場所でしょう。この広場を見下ろすがごとく横に 600m の超高層ビルも最近完成しました。このくらい、宗教というものは人を集める強力な力があります。

〔スライド〕日本を見てみると、日本の場合ももちろん建築と付属する領域の歴史があり、古いものでは仏教寺院の伽藍があります。とはいえ、例えば、法隆寺の回廊の内側は、市民が集まる場所では決してありません。逆に、人が入ってはいけない場所として使われてきました。伊勢神宮などでも同じで、宗教的な空間は、人が入ることを禁じられているのです。ボリュームが大きな日本建築としては、東大寺の大仏殿があります。創建当初は、高さは今と同じですが、横幅はこの倍あったと言われています。これももちろん、民衆が中に集まるわけではありません。行事の場合でも建物の手前の空間に人が集まります。大仏殿に入ることがある方はわかると思いますが、中は大仏の回りをぐるりと巡るように作られた空間で、とてもたくさ

んの人が入るようなものではありません。

〔スライド〕中国でも紫禁城の前に人が集まられます。映画などでもそうした様子を見ることがありますし、韓流歴史ドラマでも宮殿の前の広場に人が集まる様子が出ていますが、これも市民ではなく、あくまでも皇帝とかもしくはそれに準じる人が権力を示すために、臣下や兵隊を並ばせる場所です。人を中に入れるような大空間の施設は、アジアではほとんど発達しなかったのではないのでしょうか。



〔スライド〕アンコールワットの巨大建物でも同じであり、内部空間があって人を集めるというものはありません。建築史を勉強すると、どうしても西洋建築史が中心になりますが、大空間の歴史も西洋建築の話が主となるのです。

〔スライド〕ヨーロッパに話を戻しますと、その後教会がますます巨大化し、ゴシック建築が登場します。今日の主題の景観と絡めると、大事なものはゴシック建築というのは、大空間を成立させるために柱が枝分かれして加重を伝え、外のフライング・バットレスなどもそうですが、そうした構造系がそのまま建物の内外の形に表れています。つまり、この大きい構造物をつくる構造が、そのまま景観になっているのです。それに多少、装飾的要素も付加されているということでしょうか。これはミラノの大聖堂ですが、空間を作る構造に外観が呼応しています。



〔スライド〕ビザンチン建築の場合も同様で、例えばハギア・ソフィアはドームを連結していくことで内部空間をつくっていますが、断面図を見ると、中に人を集めるためにドームを連結していることがよくわかります。しかも、それがそのまま外観に表れている構造になっています。つまり、ゴシックやビザンチンでは大きい空間をつくる時は、まずその空間を成立させることが第一の目的であり、そのための構造と都市に表れてくる表情とがほとんど一致していました。

〔スライド〕それがガラッと変わるのがルネサンスです。ルネサンスの代表的な建築である、アルベルティによるサンタ・マリア・ノヴェッラであれば、完全に構造とは関係なく、都市のファサードを非常に知的につくっています。知的操作としてファサードをつくり、これが都市に面している。例えば、この教会の内部は、後期ロマネスクからゴシックの過渡期のものですが、内部空間の造型とファサードとは全く関係がありません。つまり、ルネサンスで都市文化が成熟したときに、その都市に対するファサードの考えが建物本体とは独立したものと出てきます。



〔スライド〕後期マニエリスムでは、アンドレア・パラディオが劇場をつくります。劇場は新しい都市施設であり、それまでは教会や宗教施設があった。最初はコロシウムがありそれが廃れました。そして教会が出てきて、次に出てきたのが劇場という内部空間をつくるということです。

これはパラディオのテアトロ・オリンピコですが、非常に面白いのは内部です。都市のファサードのようなものを客席に面するようにつくっています。それから、天井にも空を描く。あたかも観客席が屋外劇場であるかのようです。反転していると言いますが、劇場の中に入ると、そこには都市があるといったことをパラディオは狙っています。プランを見ると、建物の中に入ると街のファサードがあり、パースが効いた街並みが奥に向かってに続いています。これは同時代のセルリオによるドーイングです。都市の景観ということがルネサンスのころ非常に意識に上がってきて、

ばらばらなものは良くない、パースが効いたようなものが都市の景観として優れているという議論が出てきます。

〔スライド〕その後、劇場建築はますます発達し、そのための構造も発展しますが、劇場において構造は隠すべきものでした。例えばパリのオペラ座が 1875 年に出来、都市に対し非常に祝祭的な効果を与えます。ですがその外観が、中の大きな空間の構造と関連しているわけではありません。このオペラ座の、20 年以上前にはすでにクリスタル・パレスが登場していて、近代に一気に移行します。近代の、ガラスと鉄でできた建物は、そうした要素をそのまま表情として内外に表しています。だからこそ、建築家から非常に非難をされたのだと思います。つまり、構造表現そのものが建築表現になってくる、そういう近代的精神のさきがけが、クリスタル・パレスなのです。

〔スライド〕同じところに、温室なども登場していますが、時代はそう簡単には前に行ってくれません。フランスの場合、前後するアンリ・ラブルーストの大学の図書館ですが、その内部は鉄骨造で新しい建築構造を採用しているものの、外観のほうは非常にクラシカルです。より有名なパリの国立図書館も鉄骨の技術により、全く新しい建築空間をつくっています。皆さんはその写真を見たことがあると思いますが、ファサードの写真は見たことがないのではないのでしょうか。というのは、ファサードは取るに足らないものだからです。



〔スライド〕1889 年にできたエッフェル塔も非常に論争になりました。やはり、構造がむき出しの構造物が景観になった。それがものすごく非難をされたことは有名です。一方で、今となると、エッフェル塔がパリを代表する景観になっているのは幾分、皮肉ではありますが。その後オルセー駅という鉄道駅ができ、今はオルセー美術館になっています。駅として最新技術であった鉄骨を使い、光を十分に入れるということで作られたのですが、エッフェル塔より後のものである

にもかかわらず、エッフェル塔が景観的に批判されたことを受け、非常にクラシカルな、ルーブル美術館に近い場所にあるのにふさわしい、古典的とも言えるファサードを持っています。

〔スライド〕こうしたことは、フランスに限らず、各地で起きています。例えば、イギリスのキングスクロス・ステーションも、都市に対するファサードは石積みの重々しいものですが、中は軽快な鉄骨造によるとても明るい空間です。スタジアムの話出てきませんが、同じ大空間のストラクチャーということで理解してほしいと思います。こちらはお隣のセント・パンクラスステーションで、都市に対しヴィクトリアン・ゴシックの傑作ともいえるファサードを持っていますが、中は純粋な鉄骨造がむき出しになっています。

つまり、新しいテクノロジーが登場して、新しい空間をつくれるようになったときに、それは都市に対してどういう顔を持つべきかという試みがずっとなされてきたわけです。こうした鉄骨造による大空間が出てきたのと同じ 19 世紀後半という時期に、近代スポーツが始まり、そのための施設としてスタジアムというビルディングタイプが登場します。

〔スライド〕戦前に建てられたベルリンのスタジアムです。150 年ぐらい前から、ようやくスポーツのために人が集まるようになりました。確かにギリシャやローマの時代にもありましたが、その後廃れ、近年になりスポーツで人が集まるニーズが出てきて、スタジアム建築がつくられるようになります。

一方、ベルリンのスタジアムはヒトラーに近い人が設計して、例えばヒトラーは広場をつくり、政治のプロパガンダに使いました。ですから、都市に人が集まるのも、1 歩間違えると政治に使われるということも 20 世紀には起きています。ベルリンのオリンピック・スタジアムは、近年になって改修されています。

〔スライド〕私の持ち時間もあと少しですが、このようにして都市の中にスタジアムが出てくる。ところが、調べてみると、現代でも都市の中のスタジアムはあまり事例がありません。東京であれば代々木の体育館がそうですが、しかもこれは都市的にとてもうまくいっている体育館です。都市との関係をととても良く読み解いてできています。あとは東京ドーム、さいたまアリーナなど、都内にある大規模室内空間は数えるくらいです。調べてみると、ニューヨークもマンハッタンの中にはマジソン・スクエア・ガーデンぐらいしかありません。都市とスタジアムがどういう関係かは実はあまり事例がなく、これからの課題かもしれません。

〔スライド〕優れたスタジアムとしては、ミュンヘンのフライ・オッターによるもので、スタジアムと周りの環境をいかに連続させるかをテーマとした、非常に素晴らしい例だと思います。それから、最近ではシンガポールが都市の真ん中にスタジアムを核とした巨

大なスポーツコンプレックスをつくり、スポーツ施設を新たな都市のハブにしようとしています。シンガポールはそうした宣言をしており、都市の中のスタジアムの位置づけに力を入れています。

駆け足でしたが、大空間の歴史があることを最初に頭に入れていただけたら幸いです。以上になります。ありがとうございました。（拍手）

司会 今村先生にいま一度拍手をお願いいたします。次は斎藤先生をお願いします。画面を切り替えている間に、斎藤先生のご略歴をご紹介します。

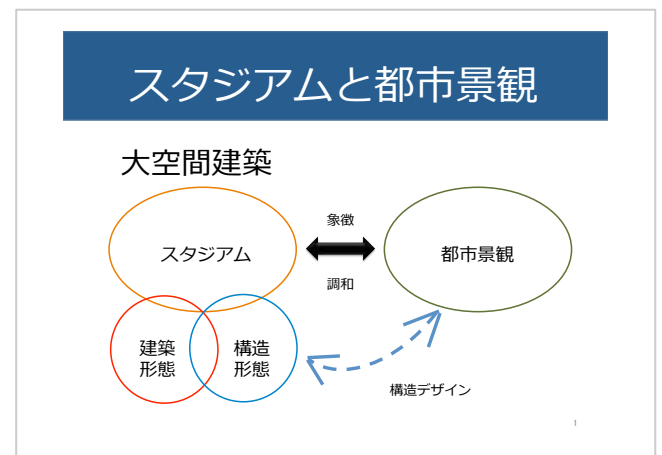
斎藤公男先生は 1938 年のお生まれで、日本大学在学中には坪井先生に師事され、バックミンスター・フラーに魅了されておいででした。その後、日本大学理工学部建築学科で教鞭を執られながら、空間構造デザイナーとして数多くの作品と著作を生み出され、ハイブリッドテンション構造の設計の第一人者でいらっしゃいます。現在、構造設計、構造デザインに関心を抱く方々のための集いの場として、次世代の建築界に新しい活力を生み出すことを願われて、アーキニアリング・デザインフォーラム（A-Forum）を主宰しております。

それでは、斎藤先生、よろしくお願いいたします。



斎藤 皆さん、こんにちは。略歴でもわかりますように、なぜ私がここに立っているのか、まだ自分でもよくわからないでいます。

とりあえずスライドはつくってききましたが、2 部の前段ということで気楽にお聞き願いたい。と同時に、今さまざまな議論が沸き起こっていますが、私なりに関心のあるキーワードを幾つか紹介して話題提供させていただきます。



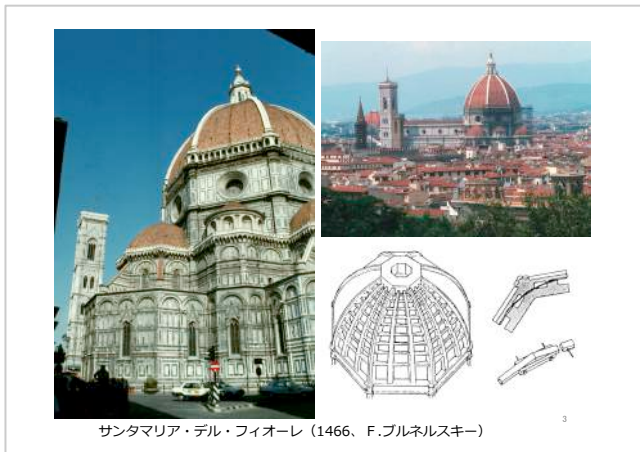
そもそも、スタジアムという定義が明快ではないと思っています。非常に大きな空間だということで、都市に対しては象徴性、調和が必要ですが、今村さんが話したように、歴史的に見ても、あるいは意匠的に見ても、建築形態からの見方がまずあります。私は構造という立場なので、直接都市景観に結びつかないのですが、構造形態という言葉でここで掲げさせていただき、構造デザイン的な視点からどんな関係があるのかを、いろいろ話してみたいと思います。



今の歴史の中にも話がたくさんありましたが、まず古代の大空間の代表を3つ、ご紹介したいと思います。

1つはローマ時代のパンテオンで、マルクス・アグリッパの名前がしっかり刻まれています。大変なエンジニアであると同時に、皇帝を支えた武人でもありました。

2つ目はイスタンブールのハギア・ソフィアで、キリスト教からイスラム教になっても世代を超えてこれを継承してくれたことは驚くべきことです。周りにブルーモスクなど、たくさんの宗教建築があります。建築の空間構成上で大変大きな改革をしたのだらうと思います。



3つ目はサンタ・マリア・デル・フィオーレ、フィ

レンツェにある花の大聖堂です。ミケランジェロの丘から眺めると、右上のように都市を象徴するような、素晴らしく威風堂々たる姿をしています。3大組積造と呼んでいますが、これはアーキニアリング・デザイン展で3つを同じスケールで制作したものです。大変ユーモラスな模型です。パンテオンは、いわゆる技術の可能性をひたすら求めたということで、広場からはドームの存在はあまり見えないたたずまいをしています。それから、ハギア・ソフィアは、建築空間の新しい構成方法。最後のサンタ・マリア・デル・フィオーレは、都市のまさにシンボルです。スケールはあまり変わらないのですが、それぞれの役割が時代とともに変わってきたと言えると思います。



19世紀を飛ばしますが、現代の20世紀も3つほど挙げたいと思います。いま今村さんが挙げたように、私にとっても「代々木」は忘れ難い50年前の大学院の1年生のときです。



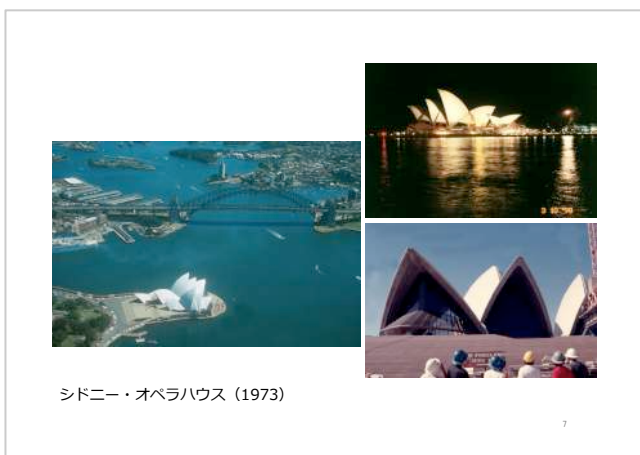
この設計のいちばん端っこで手伝いをしました。25年ほど前に前橋でグリーンドームという建設をやっていました。それを見に行くついでというか、これがメインだったのですが、とにかく上から代々木を見たいということで、セスナ機で撮影したものです。少しサビ

が出ていて不安でしたが、いずれにしても原宿と新宿に向けて大きな口を開いた都市の渦が、この建築の大きな命、あるいは都市軸がしっかりしている。都市的なスケールに感嘆しました。

いろいろなストーリーがありますが、今日は時間がありません。とにかく手づくりの模型をひたすらみんなで提案し、それがだんだん議論を重ねて1つの方向が決まってくる。コンピューターがない時代だからこそできた、1つの奇跡だろうと思っています。



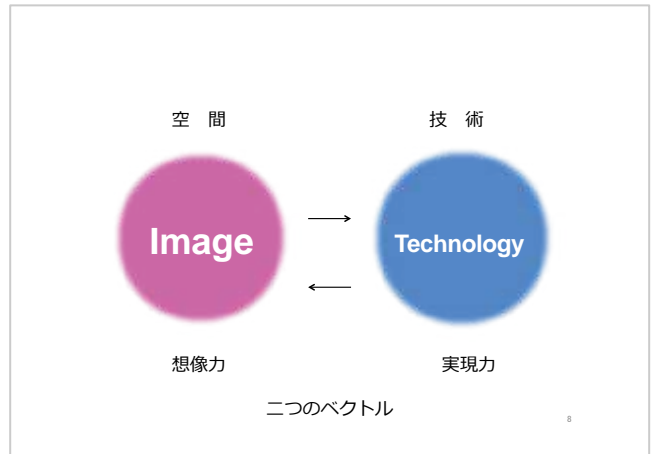
2つ目はミュンヘンのオリンピックです。これも建築家の方が行くと、皆さん結構驚かれて「すごいものがあるんだな」と言われます。ご存じのフライ・オートーの軽量構造から発展したものです。技術もさることながら、ドイツ人らしい緻密な設計です。いちばん感心するのは、これが公園の中に自然とうまくハーモナイズして、水と緑が巧みに有機的かつ無機的な建築を引き立たせている。これが大変素晴らしい。



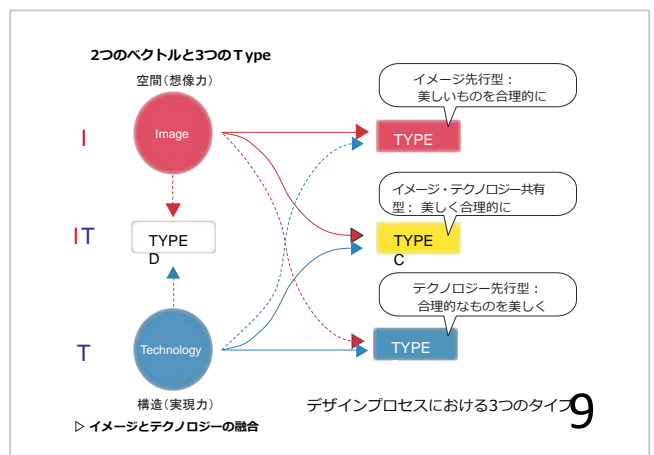
3つ目は好き嫌いがずいぶんあるようですが、シドニーのオペラハウスです。ウッソンとオブ・アラップが本当に死闘を繰り広げたような建物ですが、16年かかったとは言いながら、オーストラリアは大変な財産を持ったわけで、お金をかけても良いものができる

ということは素晴らしいことではないか。

20世紀の3つのモニュメントを先ほどの古代のもの比べると、スチールと石という素材も明らかに違います。それから、20世紀の3つに共通しているものは、テンションをうまく使っていることです。新国立の話は2部のほうかと思いながら、少し気になる幾つかの事柄を紹介したいと思います。



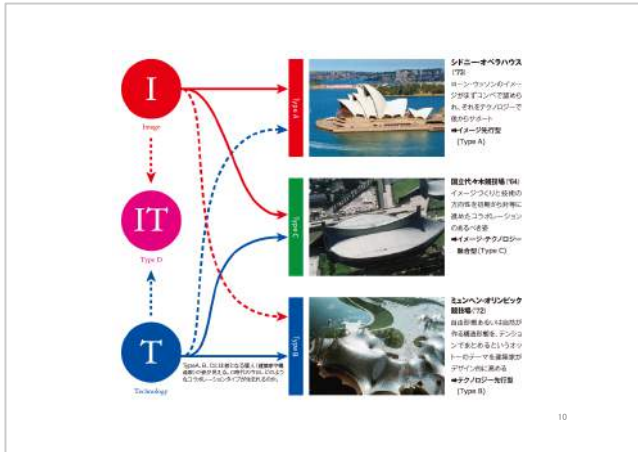
まずはAIJ（日本建築学会）のことで。ここでアーキニリング・デザインを中心に、いろいろなイベントをやってきました。アーキニリング・デザインを話すと長くなりますが、要するにエンジニアリングデザインと、アーキテクチャという非常に難しい設計の作業をもっとコンバインして、お互いに融合、触発、統合するという2つのベクトルがもっと必要だろう。わかりやすくイメージとテクノロジーと呼んでいますが、空間と技術あるいは想像力と実現力を、お互いが一方ではなく双対的にどうやるかということです。



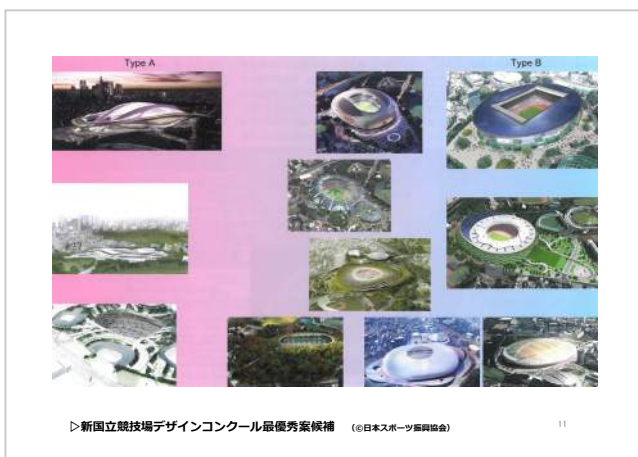
ここにはいろいろな見方がありますが、例えばそれをデザインプロセスとして、少し乱暴ではありますが、3つのタイプに分けてみました。タイプAはイメージがどどんいき、それをテクノロジーがうまく融合してくる。もう1つは、テクノロジーが先行して、イメ

ージで魅力的に仕上げる。Cは、それが当初から離れ難く一体になっている。

それを、いま挙げました 20 世紀の 3 つのモニュメントを当てはめてみます。シドニーのオペラハウスは、ウッソンのイメージをアラップがひたすら実現に向かって努力した。ミュンヘンはフライ・オットーの、いわゆるミニマムサーフェスを、自然と大変うまく調和させながらデザインをした。代々木は何といても、その両者が統合された形だろうと思います。



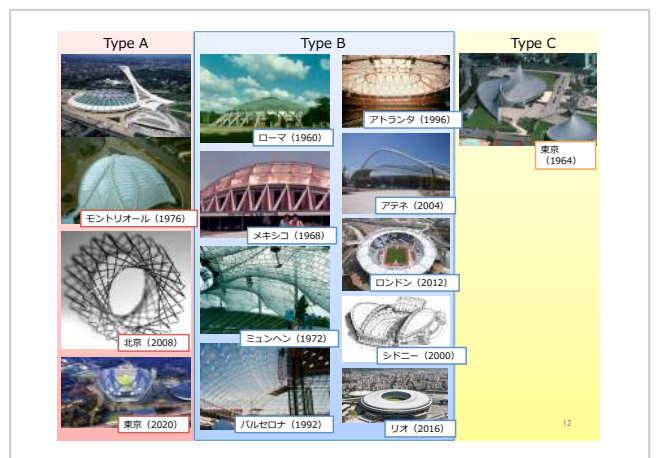
そのようなコンセプトで古今東西のものをざっと見てみると、意外といろいろな面白いものが同じテーブルに、全くフラットに出てくることは大変面白いです。ただし、その ABC のどれが良く、「おまえの仕事はこうだよ」ということは絶対あり得なくて、当然、中間もありますし、移行することもあります。そういうことをやることにより、歴史的なことが縦断的に見られることが面白い。



そんな視点をもって学会で何かやりたいということで、2013 年春ごろにこの計画をやりました。つまり、オリンピックの最優秀が決まったけれど、本当にこれでいいのかということを中心にみんなで議論しようと、2013 年の秋ごろにやりました。同じころ、槇先生の JIA の

論文が出たわけですが、たまたま同じ頃でした。並んでいるのは最終案の 11 の作品です。それを先ほどのタイプ A と B に分けてみました。もちろん、異論があり、「おれのはタイプ C だよ」と、ザハ事務所の人はおっしゃっていました。しかし、見てみるとわかるように、この辺がタイプ A に近いのではないかと。非常に要項にしっかりとまとまった、例えば伊東豊雄さん、仙田先生の案も、明らかに開閉をどのようにしたいかということからスタートしている。そのことが何となくうかがえます。

そのことをもう少し歴史をさかのぼり、過去のオリンピックであるとか、ワールドカップなどに敷衍するとどうなるかをやってみた図です。



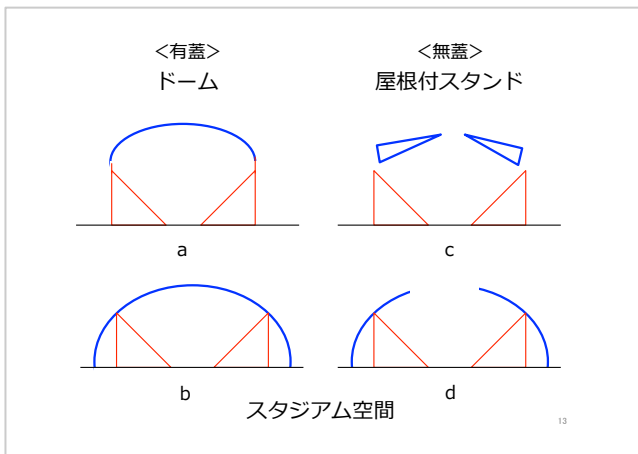
例えばタイプ A は、大きな話題を呼んだモントリオールのオリンピック・スタジアム。オリンピックのときは屋根がなく、塔も下のほうしかできていなかった。それから、ご存じの「鳥の巣」、「東京」もザハのイメージが強いかなというふうに、ここに入れてみました。あとはいろいろな技術的な、非常にイノベティブな、うまくデザインされた名作がたくさんあります。タイプ C がこの辺にあるということです。

タイプ A の 3 つの共通点は、いずれも開閉膜を付けようと思ったけれど、うまく付かなかった。あるいは、付けたけれど、うまく動かなかった。こちらは予算と技術で取りやめになった開閉膜で、今回の東京の位置づけが、ちょっとさみしい感じもします。

この中で 1 つだけ紹介したいのはアトランタのもので、これはなかなかの名作で、Levy さんが考えた、いわゆるケーブルドームです。バックミンスター・フラーの発想になりますが、中々良い建物でした。都市のシンボルとしても、アトランタの人たちが愛していたのですが、昨年行くと大きな工事が始まっていたのですが、何の工事をやっているのかと思うと、ここに新しい開閉屋根のスタジアムを建設中でした。まだ 20 年ぐらいしかたっていないのになぜ壊すのかと聞くと、スポーツ空間が閉ざされているのではなく、青空のと

きは青空を見たいじゃないか。それが建物としての、市民のリクエストに応える道だということでした。

学会ではできるだけ若い人たちに、こういう問題を一緒にの問題として考えてほしいということで、9つばかりの大学でテーマを掲げて歴史の問題、シンボル性、技術や環境など、さまざまな話題を選んだ。今日発表された今村先生が千葉工大の学生さんたちを指導され、今日改めてプレゼンテーションをしていただきました。ありがとうございました。



ここでスタジアムの構造形態を眺めてみたいと思います。有蓋、無蓋という言葉がありますが、ドームという単一空間、それからスタンドの上だけ屋根が付くという考え方があります。ここに a、b、c、d の分類があります。これに開閉という言葉を使うと、a、b では閉めている常時の形をどうやって開けるか。c、d は常時開いているところをどうやって閉めるか。この2つの問題があります。今日は時間がないので c、d だけお話をしたいと思います。c は、いわゆるキャンティレバーですから、これはガリレオ・ガリレイの時代から大変難しい問題で、非常にエネルギーがかかるものです。



美しくデザインされたネルビーのフィレンツェ・スタジアムです。あるいは、取り壊されてしまいましたが、旧国立競技場もそうです。キャンティレバーとは別に、スタンドの後ろ姿が都市景観には重要になってくるといって、幾つか紹介したいと思います。

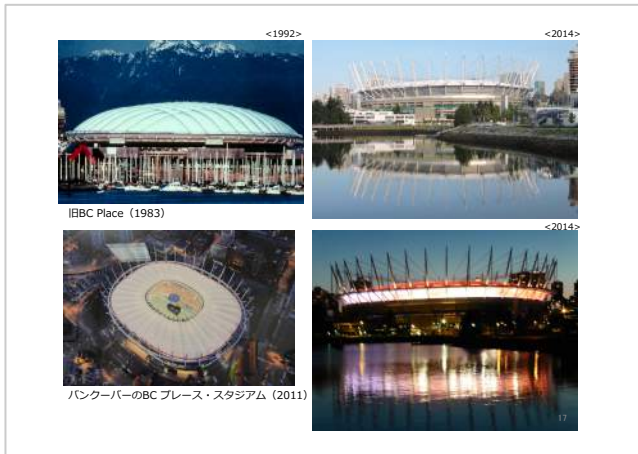
例えば、ブラジルのワールドカップ、あるいは今度のオリンピックに使われる、いちばん大きなマラカナンスタジアムです。これもかつて、キャンティレバーだったのですが、シュライヒさんの得意とするフープ式のテンション構造に生まれ変わり、非常に大きくなりました。しかし、バックのこの辺は都市に対しては強圧的、アグレッシブな表情になっています。



同じシュライヒさんが最初に大規模なスタジアムをやられたのは、シュツットガルトのダイムラーです。最初は陸上競技場の選手権をやった後、そのときにも大きく改築されましたが、終わってからはサッカーの専用スタジアムとして、さらに屋根を付け、ピッチ近くにスタンドも出し、良好なスタジアムにどんどん改変しています。外観も非常に軽やかですし、都市景観にも優しいデザインだと思います。



東京ドームの兄弟のようなものですが、バンクーバーのBCプレイスがあります。



冬季のバンクーバーオリンピックの開会式、閉会式に使われました。ところが、これも市民の期待に応えようということで、下部構造はそのままにして、上部構造だけを取り替えて車輪型の、シュライヒさんのいちばん得意な経済的な開閉屋根になった。

バンクーバーの人にとっては、“王冠”と呼ばれるモニュメントになっています。住民のマンションは近くにたくさんありますが、周りの住民から音響の問題などの苦情は出ていないということです。

このスタジアムの特筆すべき点は膜の開閉だということです。私もこの上に上り、動作を見させてもらいましたが、本当にスムーズにうまくいっている。いちばん危険なボンディングなども回避するような、空気膜を併用している。



女子ワールドカップでなでしこが頑張ってそろそろ決勝なので、何とか2連覇してほしいのですが、このときに「おっ」と思ったのは、彼女たちがいま歩いているピッチの芝生は人工芝です。サッカーは天然芝でなければだめだと思ったのですが、ワールドカップでの人工芝はいい。テレビを見ると彼女たちも、「球の転がりが結構いい」と言っています。人工芝になると、いろいろな問題の解決の方法がすて違うだろうと思いま

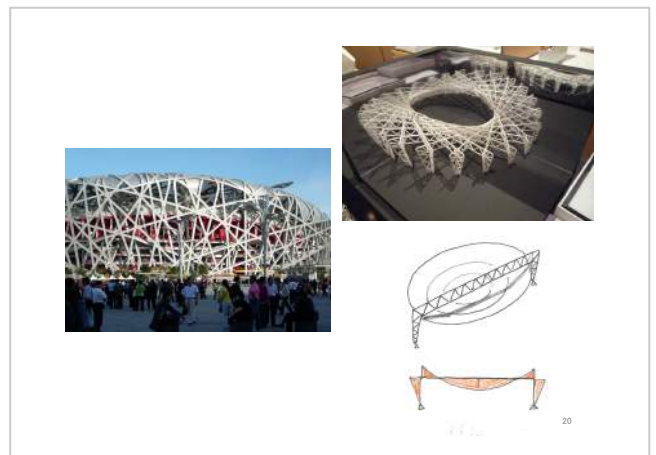
す。ですから、構造とかだけではなく、技術の進歩はこういうものに対する進歩もあるので、その辺がどうなるかということも重要な課題かと思います。

私もエコパでスタジアムを設計させてもらいましたが、芝生をどう育てるかが大変難しく、太陽だけでなく風がどう吹くとか、そういう問題が大変厳しくなります。なるべく周りの景観になじむように、形態を無理なくつくろうということがテーマでした。この後も天然芝でイベントをやりたいと、市長さんからずいぶんリクエストがありましたが、これはなかなか難しいので結局見送りになりました。

私の好きなスタジアムの1つを紹介します。パリーのサッカー場、レンゾ・ピアノです。客席とうまく一体になり、分節化されて素晴らしいのですが、このころからスタンドの後ろをきれいに見せたい。それが1つ、景観に貢献するのではないかという見方が増えてきました。タイプdになります。



その先駆けが北京の鳥の巣だろうと思います。つまり、ずっと下まで全部覆ってしまう。二重になるのでコストがかかりますが、こういうことにより、外側のファサードデザインを魅力的にしようということだと思っています。



先月もここに行ってきましたが、今度世界陸上に向け修復されていますし、オリンピックの冬季もいま誘致しようということです。ここは、冬はスキー場で、いちばん上のスタンドの屋根の上から滑って降りてくるということで、中国ならではのびっくり仰天しましたが、観光名所になっているわけです。

dのタイプはアリアンツのミュンヘンLEDを利用したものだとか、昨年のマナウスのブラジルのスタジアムも、屋間は表情が非常に豊かになります。南アフリカの例やワルシャワのスタジアムもそういう例です。

〔スライド〕ブラジルに行くと、世界遺産のブラリアには新しいスタジアムができています。世界遺産の中に新しいものができたとき、どうなるのかと気になりますが、2枚屋根のシンプルなものとマッチングした面白い建物だと思います。これも構造システムはシュライヒさんの車輪構造になっています。



アリアンツ・アリーナ(2005、ミュンヘン)

マナウススタジアム(2014)

21

きょうはあまり触れないようにというお達しがありますが、気になることだけ少し。

「新国立」のデザイン

- 規模が大きすぎる。
- 都市景観になじまない。
- ダイナミックで未来的な形態である。
- 日本の沈没を待つ海亀のようだ。
- 開閉屋根は本当に必要か。できるのか。
- アーチは諸悪の根源・元凶だ。

22

規模が大きすぎる。それはそうですね。8万人というコンペの要項ですから、そういうことです。都市景観になじまないというのも、まさにこのことで、今日の議論のいちばんのテーマだろうと思います。ダイナミ

ックで未来的な形態である、というのは安藤さんが言われたかもしれませんが、そういうことも何となく理解できます。磯崎さんのこの言葉はきついなと思いますが、このように思っている人も大勢いるのかな。

しかし、構造形態としていちばん関心のあるのは、開閉屋根はできるのかという辺りです。これは設計チームも頑張り、ストーリーをしっかりとってくれたと私は信じています。

もう1つ、今日の構造形態のテーマの中で「アーチは諸悪の根源・元凶だ」という短いフレーズですが、こういうのはとても危険だと思います。実は、その文脈の前後が必ずあるはずで、これだけ取り出して話は絶対できないはずで、その前後の文脈を読んだ中で、これが何を言われているのかを確かめてから議論をしなければいけないと思います。それは置いておいて飛ばします。

ザハ展を家族にもぜひ見てもらおうと思い、奥さんと娘を連れて行きました。何が良かったかというと、家具がすてきだったと言っていました。非常に魅力的だと。

最近ではAND展で中国を5カ所回っていますが、ザハの仕事も幾つか見てきました。これは広州のオペラハウスです。初期のころなので結構水漏れしたりして大変ですが、これは広大な都市のスペースの中にあるので、それほどおかしいという感じは……。まあ、そうだなという感じです。

これは先月、南京に行ってオペラハウスを見てきました。だいぶ成熟度が上がり、フィニッシングもよくできている。ただし、全部同じ窓はないし、直線や直角ラインもない。これはどうやってお金をはじくのだろうと考えさせられる。そういう意味では、彦根さんの話にあると思いますが、ロンドンもザハのデザインですが、それを支える構造システムは半端ではない感じがします。

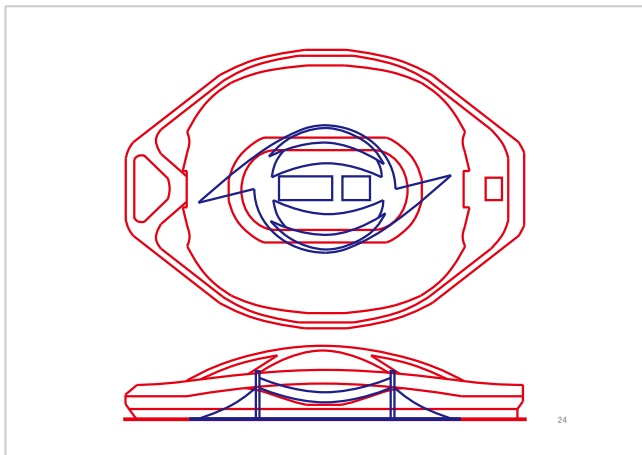


CATARのアル・ワクラFIFAワールドカップ・スタジアム (Zaha Hadid, Qatar, 2022予定)

いま設計が進行しているかもしれませんが、これはカタールのザハの作品で、シュライヒさんの事務所が

フォローしているようです。ここの開閉屋根は強い陽射しを遮るという意味の開閉です。

〔スライド〕アーチがやはり気になるので、少しだけコメントしたいと思います。まず、大きさは、「代々木」は 126m の間隔で、それに対し「新国立」は長さで 3 倍、面積で 9 倍、立体でどうという話があります。



ここで1つ、そのセクションを比べてみました。有名なイェール大学のキールアーチ、我々がやった岩手、代々木はテンションがキーです。

こういうものと比べてみると、当然そういう手もあるのだと思うようなキール構造。そういう見方が1つあるかと思えます。

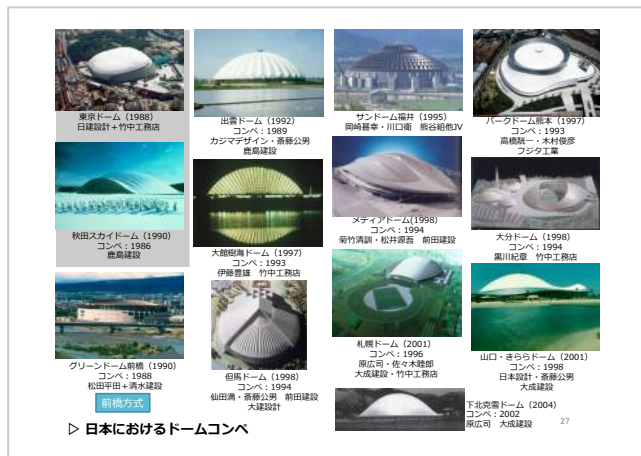
アーチは、もともとは古代ローマから始まり、エッフェルがつくったギャラビ鉄道橋もそうですが、使いようによっては非常に合理的なものだということは、皆さんもたぶん合点していただいているのではないかと。さらに、アーチも都市のモニュメントになりますし、さまざまなワールドカップのスタジアムも繊細かつきれいな。カラトラバの作品もありますし、うまくできているわけです。



私はたまたま岩手の体育館を、ちょうど 50 年近く前に設計することができました。そういうものを少し

アレンジすると、アーチ構造がどうなるか。それからケーブルネットと組み合わせるとどうかという議論がたぶんあると思いますが、今日は時間もないので。

いずれにしても大屋根は大仏殿のように、森の上の軒先がきれいだというのが私の 1 つのドリームです。おそらく、ザハさんには認めてもらえないだろうと思いますが、です。



あと、急いで言うと設計システムの話があります。坪井さんと丹下さん、槇さんと木村さんの個人的な協同、あるいは国際コンペが入ってきたときに、それをどのように日本流にアレンジしたか。いろいろな事例がありますが、日本の工夫でうまくいった例とかもあります。ドームでいうと東京ドーム、秋田スカイドームのような、特命やゼネコンだけではなく、設計事務所あるいはアーキテクトとゼネコンが予算と工期とメンテナンスを全部含んだ上で、デザインの魅力を争う。これはいわゆる「前橋方式」と私は呼んでいます。そういうことをすることにより、アーキテクトあるいは設計事務所が最後まで責任をもって仕事をする。



日本の中では 20 個ぐらいのドーム建築がしっかりできたという事実を、ぜひ皆さんにも知ってもらいたい。何かそういうことが、今回うまく作用するといい

なと願っています。 私がたまたま関係した出雲ドームであるとか、エコパスタジアムとか、設計しているときからディテールからコンストラクションを一緒に練り、それを設計に落としこむ。



グリーンドーム前橋 (1990、コンペ1988)

26



出雲ドーム (1992)

28

今日の話とは違いますが、東北新幹線で行き、金沢のもてなしドームが話題を呼んでうれしいのですが、水野先生や白江龍三さんたちがつくった、全国どこにもない新幹線の駅前です。



金沢・もてなしドーム (2005)

30

ガラスとアルミニウムですが、こういう都市の景観も、ただ新しいものをつくるのではなく、重い雪や地震をどうやって軽快なガラスとアルミに落としこむかということは、単なるデザインという以上に意味が深いだろうと思います。時間があれば、その辺を皆さんと議論したいと思います。

「代々木」は50年前に手回し計算機を一生懸命回し、体力勝負の印象が今も残っています。たまたま吊屋根に上って都庁方面を見ると、本当に豊かな森林が広がっていた。「新国立」の屋根の大きさがどんな大きさに現れるのか。私はこのときはまだコンペのことを知りませんでした。何とか日本の誇りを世界に発信できるような仕事、皆さんと共に喜べるようなプロジェクトが進行することを祈りたいということで、とりあえず終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)



「代々木」の吊屋根の上から北へ神宮の森と新宿超層群、東京スカイツリーを見る

司会 斎藤先生、大変ありがとうございました。斎藤先生と今村先生に、いま一度大きな拍手をお願いいたします。

以上で第1部を終了させていただきます。ますます第2部が楽しみになるご講演をいただいたと思います。少し時間が押ししておりますので、大変申し訳ございませんが、休憩時間を少々短くさせていただき、16時5分に会場にお戻りいただきますよう、お願いいたします。

(暫時休憩)



司会 それでは、第2部パネル・ディスカッションに移りたいと思います。第2部の進め方ですが、まずパネリストの皆さまに、それぞれプレゼンテーションをいただきます。

その後、第1部のご講演者でいらっしゃいました今村先生と斎藤先生にリードいただきながら、ディスカッションを進めていく。そのような形にさせていただきたいと思います。

それでは、はじめにプレゼンテーションいただきます彦根先生、ご登壇ください。ご登壇いただきながら略歴をご紹介させていただきます。Arup 日本事務所顧問の彦根茂先生です。彦根先生は 1950 年のお生まれで、株式会社日建設計にご勤務後、1944 年に英国に渡られ Arup の一員となられました。Arup ロンドン本社にてご勤務後、1997 年から 2015 年 3 月までは Arup 日本代表を務められ、30 年以上にわたり構造設計をバックに、Arup グローバル組織の一員としてご活躍されました。彦根先生、お願いいたします。



彦根 実は、岡本会長からのご紹介で、僕がロンドンオリンピック・パラリンピックに関与したような話があったのですが、それは一切ありません。

今日のプレゼンも実はスライドの下に書いてある Jerome Frost が作成したものです。彼は 2005 年から、つまりロンドンオリンピックの招致が決まった時からオリンピックに向けた準備がおおかた終わる 2011 年まで ODA (Olympic Delivery Authority) でロンドンオリンピック関連施設の計画、立案、実行等に携わっていました。現在は Arup にて Global Planning Leader として活躍しています。このプレゼンは、ロンドンから東京へと、ロンドンオリンピックでいろいろ得た知識から、こういうことが有効に使えるのではないかということまでまとめたものです。ということですので、僕の名前に書き換えませんでした。

〔スライド〕彼がまず言うのは、当初はロンドンオリンピックの招致に成功するとは思っていなかったもので、招致が決まったときのパーティーの準備を何もしていなくて大変だったと言う話もありますが、招致に成功したわけですから、このような重要なプロジェクトをきちんと達成しなくてはいけないにしても、実績は誰も持っていなかった。そこで、一からみんなで考えながら進めたのですが、今では成功できたことでイギリスの建築業界、政府等は、インフラの整備から大

きなゲームを運営することについて、非常に大きな自信を得たことが挙げられます。

あとは、2008 年からのリセッションでかなり景気が悪かったヨーロッパの中で、英国は早く立ち直れました。これは決してオリンピックだけが原因ではないのですが、やはりオリンピックの成功がかなり大きなファクターであったに違いないと言われています。

〔スライド〕これを見てわかるように、世界で国別に競い合う大イベントには何があるかという、オリンピック、あとはサッカーワールドカップです。他にもいろいろなスポーツ競技はありますが、この2つには、みんなが活気をもって観戦するものとなっています。実は、ロンドンも東京も、オリンピックはその前に一度開催しています。

東京は一度目は 1964 年でした。64 年の東京オリンピックの選手は 5000 人、初めてカラー放送をやり、それから世界に向け衛星放送も行ったらしいのです。ただ、その恩恵を受けた人はごくわずかでした。ところが、今では選手は 2 万人と、4 倍になっています。これは裏を取れていないのですが、世界人口の 3 分の 2 の人がテレビの放送を見る、そのような状況になってきているので、ゲームを開催することは全世界に与えるすごく大きなインパクトがあります。インパクトがあるということは、大きな機会でもあるわけです。ですから、日本で開催することは日本のイメージを大きく変えられる機会でもあるということです。



〔スライド〕これは舛添都知事がロンドンを訪問し、ボリス・ジョンソンロンドン市長と会談した時の写真です。いろいろと学びたいことがある、ぜひ協力しましょう、などと話をしています。ロンドンオリンピックは日本と同じく、成熟した都市がさらに世界のトップの都市になるべく、ひとつの機会を与えられたということです。旅行者、世界からの投資があり、経済的な利益をさらに得ることが使命でした。オリンピック

を開催することにより、そういうことが何も達成できないのでは非常にもったいないことです。

ですが、これを間違いなく計画していくことは容易なことではない。時間どおりに準備もしなければいけない。交通の効率を高める。また、人々の友好的な関係は日本では「おもてなし」と言っていますが、海外からの旅行者を受け入れることは大事なことです。それから、おいしい食事を準備しなければいけない。これはイギリスにとっては結構大変なことです。オリンピック大会は、これまでのロンドンでの最大のマーケティングの機会だと考えられ、成功に向けて立ち上がったのです。市長のジョンソン氏は、ロンドンは当然トップである、トップでい続けたい。そのためには失敗はどうしてもできなかったと言いました。それに対し、東京都知事はオリンピックにより、東京がロンドンを超えることがひょっとしたら可能ではないか。そういう機会を東京は得たということだと仰っています。

〔スライド〕そうは言ってもオリンピックによって生じた都合の悪い写真もあります。成功はそれほど容易ではない。これは「post game」と書いてありますが、実際、オリンピックのゲームに間に合わない。施設が作りきれなかった場合もあります。後のことを考えないで作り、オリンピック後に全く使われないものになってしまう。このような事は、IOCも避けたい。ですから、ロンドンの成功は、IOCにとっては非常にありがたいことです。東京に対しても同じようなことを当然、考えています。

それから報道の問題です。報道は好き勝手にいろいろな方向に報道することで、国民というか市民がいろいろな方向を向いてしまい、思ってもいないような事態が起きる可能性があります。そういうことに対しても何らかの対策をしながら、楽しいイベント作りにもっていく。そういうことを考えなければいけないと思います。

〔スライド〕これはリオの2014年の模様です。今ではソーシャルメディア、ツイッターなど、便利な情報交換をするツールがつかわれており、良くないことや、思ってもみないようなことが一気にまん延することが起こり得る世界になってきています。ソーシャルメディアはうまく使えば良い方向に行きますので、活用の道も考えていかなければいけない。2020年にはまだまだ時間があるので、ソーシャルメディアにより全世界がつながり、いろいろな情報が駆け巡る。うまく使えば大きなチャンスにもなり、下手をすれば大きなプレッシャーになるということです。

〔スライド〕ロンドン大会の説明では、いろいろなところでこの話が出てきますが、ロンドン大会では6つの大事なテーマが掲げられていました。

Six Priority Themes

- Health, safety & security
- Design quality
- Equality, inclusion & accessibility
- Employment & skills
- Sustainability
- Legacy

- 健康と安全
- 高品質の設計
- 平等、包含、アクセシビリティ
- 雇用と技能
- 持続性
- レガシー

右下の図は、品質と時間と費用

ARUP

1) 健康で安全であること。2) 高品質の設計。3) 平等、包含、アクセシビリティ、これは身障者対応や聴覚や視覚の障害などを含め、車椅子だけではありません。4) 雇用と技能の育成。5) サステナビリティを考え、エネルギーの無駄遣いをなくす。最後に6) レガシー。

絵が面白いですね。何か建物をつくろうというときに、品質は大事、時間も間に合わないといけない、でも、そんなに金を使えない。その3つを満たして物事をつくっていく。そのバランスの良いことが大切であることを示しています。

2006

2012 OLYMPICS

"This is an architectural model of how I'll look."

2014

- 2/3 of the public believe Games were worth the money
- 69% believe it was a good use of public money

2/3の市民は、五輪を「費用に値するものであった」69%は「良いお金の使い方であった」と思っている。

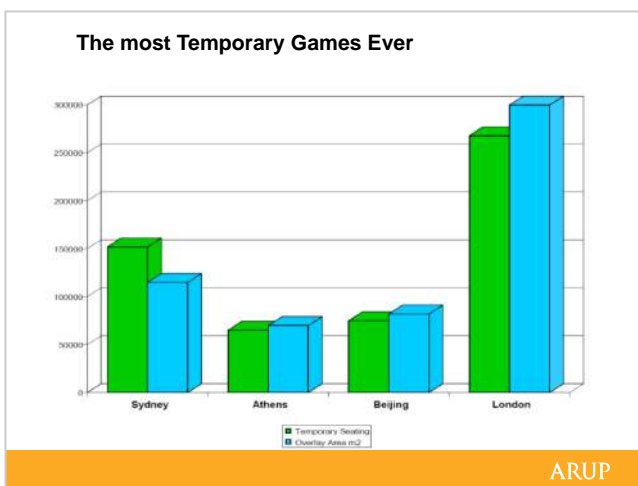
ARUP

〔スライド〕ロンドンの場合、2005年に開催が決まり、2006年には建築家は「このようにつくれるかな」と、施設建設のアイデアをイメージしました。最終的にかなり時間をかけ、設計をしました。それに対し2014年、これは終わった後の話ですが、非常に良い評価となっています。3分の2の市民は、五輪は費用に値するもので、無駄遣いではなかった。それから、69%の人は「良いお金の使い方であったと思う」との調査結果が出ています。

〔スライド〕細かく途中経過は話しませんが、まずこれが紆余曲折を経た後のオリンピック施設と、近隣を含めた全体のダイアグラムです。この中にはすでに仮設でつくるような施設も含まれていたと思います。時期的に、この辺りでマスタープランを繰り返し検討し、2006年から2009年の3年間、いろいろな改善を尽くしました。その結果、予算と時間内にすべてを準備することが可能だという自信を得たということです。

面白いのは、これはその当時からすでにオリンピックが終わった直後の計画となっているところですね。いろいろな色の点で示されていますが、オリンピックが終わったすぐ後にも仮使用、いろいろなイベントをやる計画が示されています。オリンピックの間は観戦券を持った人しかオリンピックパークに入れない。それはくじに当たるような感じで、一生懸命みんな当たるように観戦券を購入しようとしたが、行けなかった人も大勢いました。オリンピックが終わり、オリンピックパークにすぐに入れるかという、それもなかなかできません。

実は、1年以上も改修工事をして入れなかったのですが、オリンピック直後にマラソン大会等を催し、参加したい人を集め、施設の近くの色のついたところをスタート地点にして、様々な施設の利用の機会を作る。そのようにして、施設を無駄にしていないことを印象づけ、みんなに知らしめたこととなります。改修工事の後は次々と住宅を建てて行きます。言ってみれば、仮設はこのときにはつづけていますが、恒久施設もすべて、住居地域の中に存在すると考えていました。その後、住宅をどんどん増やしていきます。最終的にはオリンピックパークと言われている範囲の外まで住居地域が拡大していき、これがレガシーの最終形です。



〔スライド〕こんなに簡単に比較できるかどうか分からないのですが、ロンドンはその前の北京、アテネ、シドニーと比べると、テンポラリー（仮設）、それから

オーバーレイ、既存の施設に追加で改良を重ねた会場が非常に多いことを示しています。

〔スライド〕これはロンドン 2012 年レガシーということですが。これはまだオリンピックが始まる半年前です。まだこんな感じで作っています。手前が自転車競技場（ベロドローム）で恒設、隣はバレーボール場ですが、これは仮設です。よく言われているのは、1ポンドのうち25%をオリンピックのために使う。残りの75%はレガシーのために使う。そういうストーリーを一貫して周知をし、そのとおりのお金の使い方をしたとのこと。



〔スライド〕これが最終形です。ビジョンとしては1万2000戸の新しい住宅、それに1万の新しい仕事をその中に設ける。それがレガシーです。



〔スライド〕それから、イギリスはそれほどスポーツが盛んではないのですが、恒久施設によって若い人がスポーツに励めるようにと、レガシーとしては考えた。



London 2012 Legacy

〔スライド〕これはオリンピックパークの中ですが、美しいサステナブルなレガシーを保存する。



London 2012 Legacy

〔スライド〕これは住宅ですが、若い人たちに手ごろな住宅を提供できるようにすることも1つのレガシーです。



London 2012 Legacy

An employment Legacy - A legacy for the private sector – 20,000 jobs

ARUP

〔スライド〕これは、オリンピックパークのあるストラットフォードのまちの状況ですが、民間まで含めると2万人分の新しい仕事をつくれたと言っています。

〔スライド〕これが遠景のストラットフォードです。オリンピックのゲームのパワーが、施設をつくる直接的なレガシーよりも、さらに広く街づくりに影響した様子を示しています。イギリスの建設産業、イベント産業、さらには商業全般に関して自信を持つことができ、他国に先駆けて経済が回復し、なおかつ海外からの国際投資の機会を得ることができました。このような現象は、実はオリンピックイベントの後に起きたわけではなく、もっと前の段階、準備をしている段階からそのような状況が生まれました。ストラットフォードの街には2011年までに30億ポンドの投資がされました。1ポンドが200円とすると、日本円で6000億円です。まあまあ、そのような金額ですね。それと、先ほどの1万から2万の若い人の新しい仕事口ができたと言われています。

Lessons Learnt Principles of Success

- Plan, Plan, Plan
- Tell the 'Value for money' Story
- Engage & communicate
- Deliver...and keep delivering

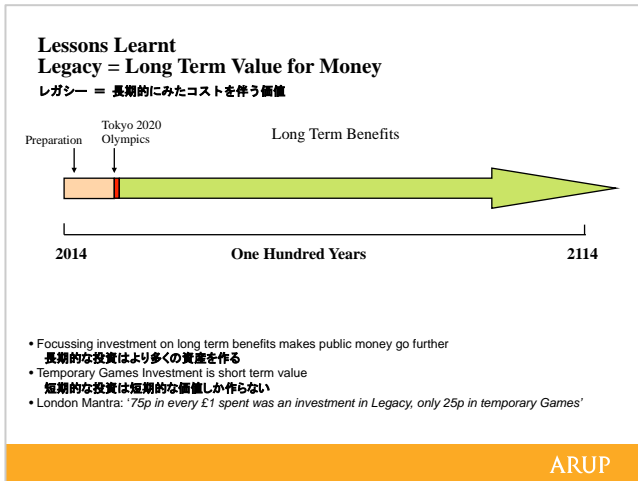
- とにかく計画を練ること
- コストの効果と価値についてのストーリー
- 従事すること&話し合うこと
- 成果を届け続けること

ARUP

〔スライド〕この準備の過程で東京にとって参考になることが書かれています。いちばん上に「Plan, Plan, Plan」とありますが、とにかく計画を練ること。簡単にこれでいいのだというのではなく、きちんとコスト、

効果についても考える。コスト、効果と価値について、きちんとストーリーをつくり、それをみんなに広めなければいけないと言っています。あとは参加を促す。話し合う、コミュニケーション、みんなに周知することを考えなければいけない。それから、成果をみんなに届け続けなければいけない。オリンピックもそうですが、レガシーと一緒に生きていくためには、みんなで理解し合って進めるべきだと言っています。

〔スライド〕これは時間軸に沿ってのスケジュールですが、東京をベースとして書かれています。オリンピックとパラリンピックを含めて1カ月ちょっとです。その短期間に対し、レガシーですが、この長さはロンドンですと100年と考えています。ここで、長期的投資はより多くの資産となるが、短期的な投資は短期的な価値しかつくりたくなくて、なくなってしまうものです。ごく当たり前のことを言っています。投資の効果から見てレガシーが大事だと強調しています。



〔スライド〕次のグラフも簡単な図です。時間軸に対し、まずオリンピックです。これはロンドンを中心に書いていますから、ややこしいのですが、真ん中のところでオリンピックのための設計と施工をします。しかし、オリンピックが終わった後にはレガシーに向けての変更、改革をどんどんやっていかなければいけないことを示しています。

〔スライド〕新国立競技場のパースですが、斎藤先生の話にもいろいろありましたが、これはいちばん初めのザハ・ハディド事務所のパースです。東京は特別なゲームになるに違いない。それはこれだけの英知をもって設計を進めている人たちが大勢いるのだから。そんなことを Jerome は言っていました。今の状況とこれをつくったときは違うのですが、Arup はコンペ段階からザハチームをサポートし、設計 JV の一員として関与させていただき、またアクアティクスセンターのエンジニアリング設計もやらせてもらったりしていますので、オリンピックの成功に貢献していきたいと思っています。

〔スライド〕東京で、2020年オリンピックを開催する機会を得たことは、日本が世界的イベントの新たなスタンダードをつくる良い機会だと。世界の人が、日本のデザインと文化を経験するショーケースになるに違いありません。日本が世界に先駆けて高齢化社会であるとか、それに対しどのように対応していこうか、健康的な生活をどうやって提供していこうか、効果的な都市管理をどうしたらやっていけるかなどについて解決策を示すことができるかもしれないのです。

それから、先ほどのソーシャルメディアですが、人々のデジタル情報への関与をどうしていくか。そういうことをいろいろと考えていかなければいけないでしょう。若い世代の人たちは、ソーシャルメディアを多用しているわけですから、そういうプラットフォームをうまく使っていくひとつの新しい機会になるでしょう。

ここに「クール」と書いてありますが、結果として1964年と同じように。その当時どうだったかわかりませんが、2020年に新たなクールなトレンドを提供することになるのではないかと。これがイギリス人 Jerome の予想です。

最後に、東京は本当にロンドンを超えることができるのか、という問いかけについてコメントしています。イギリス人としては、そう簡単に超えられてしまうのとは思いたくありませんが、東京でもロンドンと同じくらいの成功は収められるように協力したいと思っています。とりあえずロンドンからのメッセージということで、終わらせていただきます。(拍手)

司会 彦根先生、ありがとうございました。

それでは、次のプレゼンターの方の福島先生をご紹介します。福島先生は公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の会場整備局長でいらっしゃいます。1949年のお生まれで日本大学ご卒業、1971年に東京都にご入都され、2006年に東京都市整備局技監を務められたのち、東京都庁ご退任後は株式会社東京レポートセンター代表取締役社長などの役職を歴任され、現職に至っておられます。

それでは、福島先生、よろしくお願ひいたします。



福島 彦根先生のコメントに続く話としてはレベルが低い内容で、最初に2つのおわびをしておかなければならないと思います。

今日お集まりの皆さま方は東京2020年オリンピック・パラリンピック大会に大変関心をお持ちいただいている中で、組織委員会の一員としては内部統制やブランド管理などにおいて厳しいものがあります。従いまして、あまりオープンな話が今日の時点ではできないことを、冒頭におわび申し上げます。

もう1点は、皆様方の期待が高いとは存じますが本日は新国立の話は私のほうから一切ありません。リラックスして、軽い気持ちで若干のお付き合いをいただければと思います。

私は2016年東京招致の仕事に若干携わりました。IOCコペンハーゲン総会で招致に至らなかったことから、仕事へのモチベーションも低くなり、定年間近ということもあって、東京都を退職しました。その後都の関係する仕事に携わっていましたが、面白い仕事がある、皆でサポートもするから一緒に仕事しないかと声掛けして下さる人がいまして、現在組織委員会に勤めております。

〔スライド〕ご存じのことと思いますが、最初に大会の開催概要について若干お話をしておきます。東京2020大会は2020年7月24日から8月9日までがオリンピック、競技数は28競技で306種目。306個の金メダルがあると思っていただければいいと思います。2012年ロンドン大会実績では204カ国、選手の数1万500人ということです。東京大会もほぼ同様の規模で開催されると思ってください。パラリンピックに関しては、その2週間後の8月25日から9月6日までの開催を予定しております。こちらは22競技、527種目となっています。

〔スライド〕東京大会が何を指すのか、いわゆるビジョンのことです。ビジョンについてはいろいろな視点があります。冒頭にありますが、アスリートの視点、東京・日本・世界からの視点、その他あまねく皆さん方一人一人からの視点、という切り口があります。そういったものを全部考え合わせると、真ん中に記載してあるように、全員が自己ベストという表現になりました。そして多様性と調和、未来への継承という表現でビジョンを作りました。

その前提としまして、スポーツには世界と未来を変える力があるということです。これが根底にある考え方です。1964年の大会は日本を大きく変えました。ご存じのとおりインフラ整備や技術の発展です。では2020年東京大会は何かというと、スポーツには世界と未来を変える力がある。そこから全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承。こういうビジョンになったということです。

〔スライド〕次はビジョンを具体的にどう実現していくのかということです。一過性の祝祭ではなく、レガシーを残すことが基本となります。ではレガシーの考え方は何かということです。レガシーには時間的な広がりがあります。これは大会の前から意識して準備をし、2020年の祝祭、オリンピック・パラリンピックを終えたのちに、どういうものをレガシーとして残していくのか。それから、分野の広がりという側面もあります。スポーツから文化、教育、テクノロジーというそれぞれ幅広く、レガシーを捉えていく。も

う1つの側面は、地域の広がりがあります。東京のみならず、日本全体、アジア・世界にもレガシーを残していくことが大事と考えています。

そういうことから5つの柱を立てました。一つ、スポーツ・健康、二つ、文化・教育、三つ目は、復興・オールジャパン、四つ目は、街づくり・持続可能性、最後は、経済・テクノロジー。こうした5本の柱のもと世界に発信していくという構成です。

〔スライド〕次は組織それぞれがどう関わるのかということについてです。東京都、政府、経済界、JOC・JPCなどのスポーツに直接関わる団体。こういういろいろな人たちの参画を得て、計画の当初から包括的なプランを策定する考え方で臨んでいます。

〔スライド〕レガシーへの取り組み方です。レガシーについては来年8月のリオ大会までに具体的な行動計画、すなわちアクションプランを作成します。その取り組みは2020年大会後に明確に引き継がれることを意識したアクションプランでなくては意味がありません。

〔スライド〕次のトピックです。東京が2020年オリンピック・パラリンピックの招致を一昨年の秋に成し遂げた後のことです。2014年12月にIOCは、今後のオリンピックのあり方について議論を重ねてきた成果として、大きな改革を盛り込んだメッセージを出しました。これはAgenda2020というものです。東京2020大会から、ぜひこの改革の考え方を具現化してほしいという要請です。全体で40項目に及び内容ですが、会場整備に関係する大きな内容は、今後のオリンピックは既存施設の活用を前提として新設会場は可能な限り建設しないというものです。たとえば隣国に開催可能な競技施設が存在するなら、二国に開催地が拡大しても五輪開催を認めるというものです。二点目は種目の追加については開催都市に新しい種目の追加提案を保証するというものです。

〔スライド〕この表は競技会場の現在28競技のうち26競技の会場が決定しており、ここにアーチェリーからレスリングまで26競技会場があります。緑色表示の部分が既存会場を使い、白黒表示が、何らかの整備をいたしますという表です。

〔スライド〕こういうことで今回から既存の施設を有効に利活用していくということです。もう1つのアジェンダは種目の追加です。報道にもありましたが、6月までで26の競技連盟から応募のあったものを、つい先月に赤い表示の8競技に組織委員会としては絞り込みをしました。そののち8月中旬にヒアリングを実施しさらに絞り込みをして、9月以降IOCに提案したうえでIOCの判断をもらう手はずになっています。IOCは開催国の意向を尊重すると言っていますが選定のポイントは、世界的な広がりや有する協議か、オリンピック・パラリンピックの盛り上げに資する協議か、

加えて若者への波及やいかにといったあたりと言われている。

〔スライド〕競技会場と話が重なりますが、既存施設を重用せよ、ということになると、今まで申し上げてきた 8km の中に 80%以上の競技会場を設定、といった招致のコンセプトが変わります。今回若干見直して、武蔵野の森を中心とした選手村から 27km のところに複数の競技を設定します。

〔スライド〕武蔵野の森にはラグビー、バドミントン、サッカーの競技が予定されています。もともとラグビーは新国立競技場としていたものは東京スタジアムへ、バドミントンも武蔵野の森総合スポーツ施設へ、それからサッカーについては変更ありませんが、武蔵野の森を中心に 3 つの競技と、それに近代 5 種がもともと予定されていたので、それをクラスターと称することにしよう。

〔スライド〕もう 1 つは幕張です。これは選手村から 30km 程度の距離になります。こちらのほうにもクラスターをつくることになりました。

テコンドー、フェンシング、レスリング、この 3 つの競技会場を移動する考え方について、6 月末に IOC 理事会の承認を得ました。

〔スライド〕こうなりますと、今までは選手村から半径 8km 圏内に 80%の競技会場が設けられ、いわゆるコンパクトな大会がコンセプトでしたが少し変えなければならぬ。千葉県、神奈川県まで拡大することになり首都圏 1 都 7 県、3500 万人の祝祭にもなり得るというように考えることで、より未来に物語を語り継ぐ人たちの可能性が拡大します。

選手村に中心の点を置いて東西に円を描くと、このマーク、インフィニティすなわち無限大を表す意味と重ねてみるのが可能になります。コンセプトの変更です。

IOC から提起のあった既存施設の活用、開催都市でのレガシーへの取り組みなど重ね合わせると、必然的といえますかこうならざるを得ない。IOC も理解を示しました。

いずれにしても、無限大の意味は、1964 年東京大会のレガシーともいうべき既存会場を多用し、近隣県の大規模な既存施設にまで競技会場を拡大することにより、東京 2020 大会を契機に首都圏、圏域の未来のまちづくりに対しても何らかの影響を及ぼし、ひいては貢献ができるのではないかとということです。

〔スライド〕次は施設の整備にどう関わっているかについてです。建物としては現在、有明アリーナ、バレーボールの競技会場です。アクアティクスセンターは水泳系です。土木工事としては海の森水上競技場、この 3 つの施設について設計にとりかかっています。

〔スライド〕まず有明の体操競技場ですが、建物としては仮設扱いで組織委員会が担当します。つい先日

設計に着手しました。

次は公設といえますか恒設です。有明アリーナでの競技はバレーボール、パラリンピックではシッティング・バレーボールとなっています。以下、海の森水上競技場、アクアティクスセンター、それぞれオリンピック・パラリンピックでの競技予定があります。これらの 3 施設につきましても基本設計に着手しております。後段の 3 つの競技会場は恒設です。のちに資産として残るものです。前段の体操競技場は仮設扱いですが現在関係者間において後利用の可能性を検討中です

〔スライド〕次に、私の担当する分野では選手村の整備があります。左側の模型の写真は大会期間中、約 1 万 1000 人と言われていたのですが、1 万 1000 人程度の選手、大会役員が利用する居住棟です。この整備に関しての最大の特徴は、デベロッパーの方々に建設していただき、組織委員会が選手村として借り上げて利用させていただいたのちに、デベロッパーにおいて分譲なり賃貸住宅にコンバージョンするというものです。約 4500 程度の住戸を 1 万 1000 人程度の選手・大会役員向けの住戸すなわち選手村にします。

この絵の真ん中に 2 棟の超高層棟があらわされています。大会後、新たに着工する住宅もあります。

〔スライド〕この図面の青いところが先ほど説明した選手らの居住棟です。組織委員会は晴海通りから左半分のうちの、西側の部分、グレーで表している部分のところと、右のほうはビレッジと称しています。選手・役員が買い物をしたり、各国の選手間で交流する空間であったりします。青い表示のところは基本的に選手と役員しか入れません。この区域のセキュリティはかなり高度な内容が要求されます。それから真ん中のあたりはダイニングです。ここのダイニングは約 1 万人の方に一日 3 食、食事を提供すると、一日分でも 3 万食を用意する必要があります。オリンピック・パラリンピックで約二か月近くという期間で考えても膨大な量の食事を準備しなければならないことになります。食材の不作などのことを考慮すると、数年前から確保しておかなければならず、トレーサビリティもしっかりと行っておくといった対応が要求されるようです。

〔スライド〕なお、今後の大まかなスケジュールですが、先ほどすでに基本設計に着手した競技施設と、これからは始める葛西のスラロームとか、ホッケーの会場、アーチェリー、テニス。これらの競技施設も恒設施設として基本設計に本年度末には着手します。大会開催日程から逆算すると 2017 年中には工事に入らなければならないことになり、東京都の方で鋭意検討中ということです。

組織委員会が担う施設については先ほど説明した有明体操競技会場のほかに、オリンピック固有のオーバーレイと称するものがあります。これらも 2017 年か

ら基本設計に着手していくスケジュールを考えています。工事の規模感、といいますか質的には個々の場所では大した工事とは言えませんが、約30会場で一斉に発注となりますとその時点での請負環境のことも考えておかなければなりません。皆様方関係者の方々にはこれからいろいろ教えていただくことになると思います。

今日はもう少し皆様方のご期待に沿えるというか雰囲気盛り上げる内容も申し上げたいと思いましたが、いろいろな制約もありましてこのような内容になりましたことをおわび申し上げ、私からの報告は以上です。大変ありがとうございました。(拍手)

司会 福島先生、ありがとうございました。

最後にプレゼンテーションいただきますのは、株式会社日建設計取締役副社長執行役員の中分毅先生でございます。中分先生は1954年のお生まれで、京都大学ご卒業ののち、筑波大学大学院を修了され、1979年に株式会社日建設計東京本社へご入社されました。2003年に同社の執行役員東京副代表に就任され、主に都市計画分野のお役職を歴任して現職に至られます。

それでは、中分先生、よろしくお願いいたします。



中分 皆さん、こんにちは。私も福島さん同様、冒頭に2点のお断りしなければいけないことがあります。日建設計でありながら亀井でも、山梨でも、村尾でもない。

中分という聞いたことがない人間が来ているのはなぜかと申しますと、私の話にはスタジアムもそうですが、建築の話がほとんど出てきません。それから、こんなに広い会場だと思わなかったので、後ろの方はスライドが見えにくいのではないかと思います。この2つをあらかじめおわびいたします。

今日の私からの話題提供は、東京から始まる成熟都市ということで、主にポスト2020、オリンピック以降を念頭にしたグランドデザインに関してお話させていただきます。

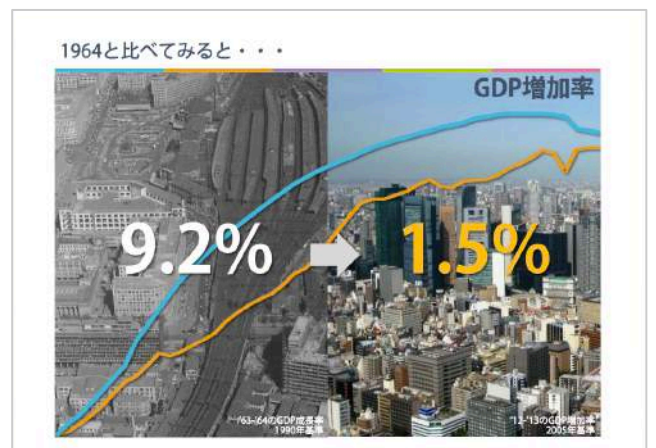
まず、なぜこういうことを考え始めたかということです。このグラフは建設界の方はよくご覧になっていると思います。横軸は1960年から2020年まで、棒グラフは日本における建設投資です。赤い線が建設投資のGDPに占める比率です。ここが東京オリンピックの1964年です。高度成長期があり、バブル期があり、その後、リーマンショックを含む失われた20年があります。

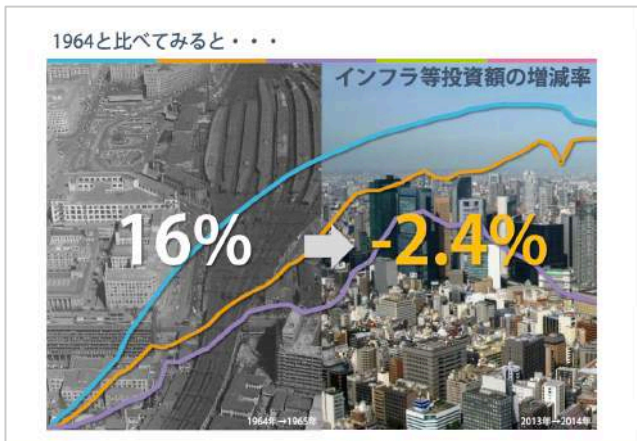
2015年以降、リーマンショックの底よりも建設投資が増えそうだと考えていますが、このちょっとした増

加でもって、今は工事費が高騰したり、工期が延びることが起きています。



では、オリンピックが終わった後は、いったいどうなるのだろうか。先食いして仕事なくなるのではないか。自分たちの仕事はプレオリンピック期、ポストオリンピック期においてどうなるのか。もう少し主体的に言えばどうするのか、といった疑問から始まりました。

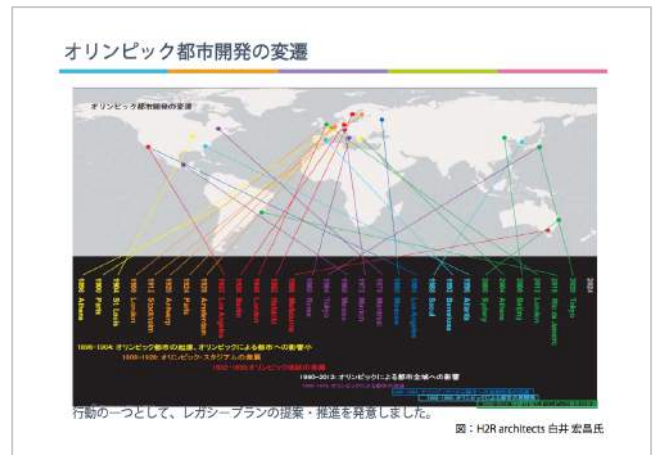




1964年当時と比べてみると、人口の増加率が今はマイナスになっています。また、GDPの増加率は、オリンピックのころは9%と、今の中国のような高度成長率でしたが、1.5%と低成長になりました。また、インフラ投資額の増減率は、前のオリンピックのときは毎年16%ずつくらい伸びてきていたのが、現在は毎年2.4%ほど減少しており、全く違う状況にあるわけです。



ただ、良いこともあります。上の写真は、私が子どものころの新宿駅です。オリンピックが終わった後だと思いますが、光化学スモッグで生徒が倒れるという時代がありました。いま中国のPM2.5が大変だと言っていますが、私の子どものころはそれを上回るような環境破壊、大気汚染があり、その後、大気の汚染物質が劇的に減ってきています。青空が取り戻された他、交通渋滞が減った、食事もおいしくなり、便利な生活になった。こういった良い面も実現していますが、この良い面が実現したことが、今後の目標をわかりにくくしている背景でもあるかと思えます。



オリンピックと都市開発の関係を簡単に見ていきます。1960年ぐらいからオリンピックが、都市全域に影響を及ぼすようになったと言われています。1980年代後半からオリンピックにより都市の再開発をしようという流れがあり、2000年のシドニーオリンピックあたりからは、オリンピックによって持続可能な都市をつくってしようという流れが出てきました。そこで、我々の行動の1つとして、レガシープランを提案したり、推進していくことの一端を担えればと発意しました。



では、目標がわかりにくくなっていく中で、いったいレガシープランを検討していく起点を何にするかということです。これは東京をみんなが大好きにならないと、やはり始まらないということで「好き」から「大好き」にしていこう。それから、いろいろな人たちが自分の問題だと認識していく。「自分ゴト」にしていこう。こういうことを起点にしました。

そこで出てきたキーワードが「成熟都市」です。成熟都市を目指したレガシープランの提案です。今まで何をしてきたかを簡単にご紹介します。



まず、たたき台となる提案ということで、去年の暮れに Post 2020 Grand Design を社内の研究会でつくりました。今日冊子を若干持ってきているので、もしご関心のある方はのちほどの懇親会でお渡ししたいと思います。

それから、2 回ほどミニ・シンポジウムを開催しています。去年 12 月 11 日には「東京から始まる成熟都市」ということで、ミニ・シンポジウムをやりました。今年の 3 月に入り「パブリックスペースイノベーション」というテーマで、同じくミニ・シンポジウムを行っています。これからの展開としては、できれば TOKYO 100 Public Spaces を皆さんと一緒に提案する。そういったムーブメントを起こせればと思っています。

簡単にご紹介すると 1 つ目が多様な価値観の受け皿をつくるということ、例えば外国人の方がずっといなくなる東京だったり、パラリンピックを楽しむ東京だったり、生涯学び続けられる東京だったりということで、絵は学びと出合える暮らしをイメージしています。



Post 2020 Grand Design で 5 つの目標を掲げています。5 つの目標は帰納的に出てきたわけでも、演繹的に出てきたわけでもなく、アブダクション的にといいますか、皆さんの議論の取っかかりとして、とりあえず仮説を 5 つお示ししたということです。



2 点目は、日本のサステナビリティモデルを発信することです。例えば、オリンピック・パラリンピック後

が楽しい東京であったり、スマートな都市生活が体験できる東京、あるいは安全で安心な東京。そして、日本は森林大国ですから、木に囲まれた暮らしがある東京、その木のぬくもりは街の中にも、といったイメージを示しています。



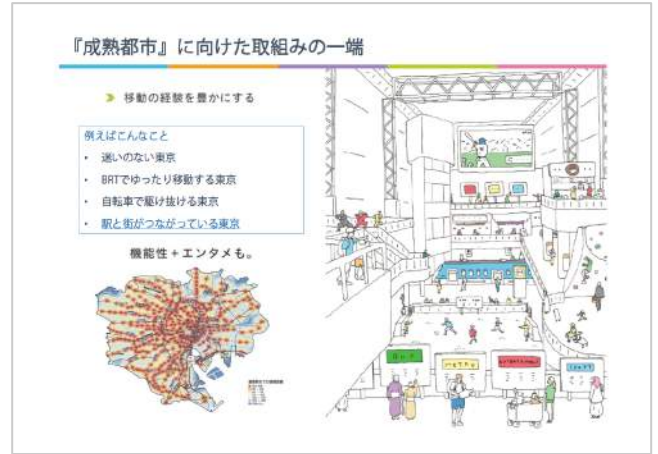
3点目は、もうだいぶ実現されていますが、日本らしさで観光客を増やすということです。アートやデザインが楽しい東京、長く滞在できる東京、日々の日常の端々に伝統や古き良き文化が感じられる東京。こういったイメージを示しています。

4点目、移動の経験を豊かにする。東京は今のところ、鉄道網、公共交通は発達していますが、わかりづらいこともあります。迷いようのない東京、あるいはバスラピッドトランジットで、ゆったり移動できる東京。自転車で駆け抜ける東京。駅と街がつながっている東京。このスケッチは迷いようのない東京ということで、移動はストレスフリーにといった提案をしています。



移動についてはもう1つ、駅と街がつながっている東京。左の図は東京の駅から歩行圏を丸で示しています。黄色のところがおおむね歩行圏ですから、東京の中心のほとんどは鉄道の駅からの歩行圏でカバーされ

ているわけですが、利便性だけではなく街と駅がつながって機能性にプラスしてエンターテインメントもある。こういった移動の経験を豊かにすることも必要ではないでしょうか。



5点目、これで最後です。こちらでは質の高いパブリックスペースをつくるということで絵になる東京のイメージです。



こちらは、身近に小さなパブリックスペースがある東京、公園ごとに特色のある東京。こういった東京が実現したらいいなという、最初の仮説の提起をしています。

パブリックスペースイノベーション・ワークショップ

何故、パブリックスペースか？

成熟都市のプラットフォーム

- ・ バルセロナ、ロンドンの成功事例に学ぶ
- ・ 東京の弱点を克服する
- ・ 自分ゴト意識を創り出す
- ・ 知識社会にふさわしい都市空間である

- 1 多様な価値観の受け皿をつくる
- 2 日本のサステナビリティモデルを発見する
- 3 日本らしさを観光客に味わわせる
- 4 移動の経験を豊かにする
- 5 質の高いパブリックスペースをつくる

H2R Architects パートナー 明治大学 兼 准講師 白井 宏昌氏	文部科学省 対話型政策形成室長 生田 知子氏
多摩大学 教授 棚野 寛氏	株式会社日本政策投資銀行 企業金融第一部長 兼 産業化支援センター長 島 聡氏

これに引き続き、パブリックスペースイノベーション・ワークショップを今年3月に開催しました。こちらには建築の方でロンドンにずっとおられた明治大学の白井宏昌先生、文科省の方、金融の方、あるいはビジネスの専門の方と、いろいろな方にお集まりいただき、パブリックスペースについての議論をしました。5つの仮説的な目標を掲げている中で、我々は当面パブリックスペースに注力したいと思っっているのですが、それは何故か？

1つは、目標の1から4をすべて支えている成熟都市のパブリックスペース、プラットフォームではないかということです。より具体的には先ほど彦根さんの話もありましたが、バルセロナ、ロンドンの成功事例に学ぶ、あるいは東京の弱点を克服する、自分ゴト意識を創り出す、知識社会にふさわしい都市空間である。こういった観点から、パブリックスペースへの着目が重要ではないかと考えている次第です。

バルセロナ、ロンドンの成功事例に学ぶ (白井 宏昌氏)

都市再生モデルとしてのバルセロナ

- ・ 公共空間の創出による境界の回復
- ・ 1999年にRIBAのゴールド・メダルを獲得 (1992年オリンピック開催)

バルセロナの経験に地元イギリスの地域再生の活路を見出した: Richard Rogers

- ・ 1999年, "Towards an Urban Renaissance"
『バルセロナ市街の再生戦略: 阿部大輔』

大London市長/Mayor of Londonの政策

- ・ The Mayor's 100 Public Spaces (Ken Livingstone, 2000-2008)
- ・ London's Great Outdoors (Boris Johnson, 2008-)




1つ目、バルセロナ、ロンドンの成功事例に学ぶ。バルセロナに行かれた方はよくご存じだと思いますが、もともとはバルセロナグリッドという外から非常に入りにくい都市のストラクチャーでした。公共空間の創出による境界の回復に努力し、スポンジ効果と呼ばれていますが、中庭や街路にいろいろなアクティビティを導入して、これがバルセロナオリンピックで訪れた人たちに非常に高い評価を受け、1999年にRIBAのゴールドメダルを獲得しています。

Richard Rogers氏が、バルセロナの経験に地元イギリスの地域再生の活路を見だし、1999年「Towards an Urban Renaissance」という提言をしています。これを受け、先ほど彦根さんの話にあったボリスさんの、もう1代前のKen Livingstone市長が“The Mayor's 100 Public Spaces Program”を提案しました。実現したのは、100カ所ではなく34カ所に留まっています。当時の市長はロンドンの公園やオープンスペースは、我々が持つ最大の資産であり、ロンドンが世界中で最も魅力的な都市の1つに挙げられる由縁です、とおっしゃっています。

The Mayor's 100 Public Spaces, LONDON

『都市はいつでも人々が集まり、話し、議論し、休み、交換する場所でした。そして、都市において偶然の出会いが起こる場所は、広場やストリート、公園や緑地、ホワイエやパブリックビルディングが担っています。』

ロンドンの公園やオープンスペースは我々が持つ最大の資産の一つであり、ロンドンが世界中で最も魅力的な都市のひとつに挙げられる所以です。

The value of public spaces from "making space for Londoners"
MAYOR OF LONDON



代表的な例です。

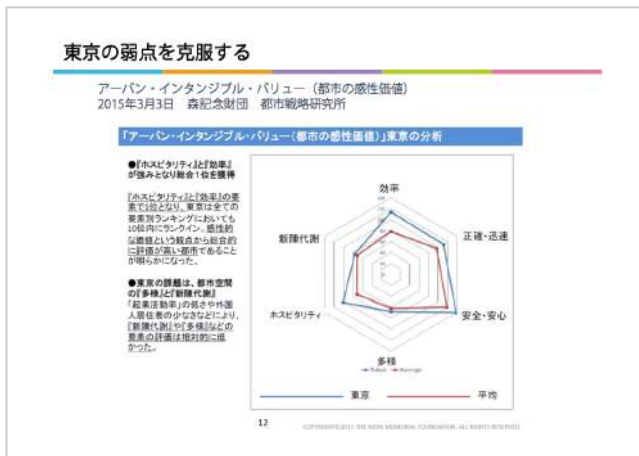
The Mayor's 100 Public Spaces, LONDON

Improving the quality of public space makes:

- a Beautiful city
- a Sustainable city
- a Prosperous city
- a Connected city
- a Safer city



これは 34 の 1 つではないのですが、キングスクロス駅周辺の再開発、あるいはテムズ川に面した狭いところですが、線状の公園や、ロンドン塔の近所にシティホールの建設と合わせてオープンスペースを整備したり。オリンピック会場はここですが、こういったいろいろな形でのオープンスペース、パブリックスペースの整備が進んでいきました。



2 点目、東京の弱点を克服する。これはたまたまお話を聞かせていただいた森記念財団さんのアーバン・インタンジブル・バリュー (都市の感性価値) の中で知ったのですが、東京の課題は都市空間の多様性と新陳代謝。ここが非常に弱いということで、こういった弱点を克服していく上で、パブリックスペースの整備は有効ではないかと思う次第です。

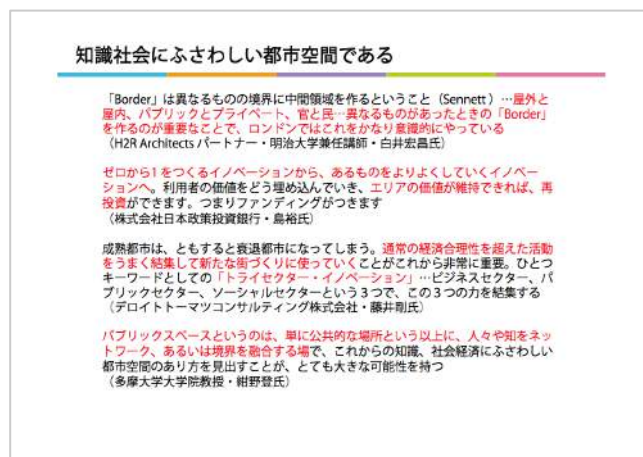


3 点目の自分ゴト意識を創り出す。自分たちがパブリックスペースの整備を推進していく主体だ、という主体性の問題です。これは先ほどの彦根さんの話にもありました現市長の政策を引き継ぎ、発展させ、いま THE MAYOR'S GREAT SPACES というプログラムを実行されています。これは 2 つの特徴があるとされています。

まず、パブリックスペースの整備の制度を厳格化し

て、前の市長は 34 整備したと申しましたが、なぜその 34 になったかは意外とよくわかっていないそうです。新しい市長はプロジェクトを選ぶ、あるいはパブリックスペースにヒエラルキーをつくっていくことを明確化した。また、整備のために Community Infrastructure Levy ですから、税金のような制度を導入している。その制度の厳格化と対照的に参加のシステムを構築されていて、参加を仰ぐことで市民がパブリックスペースをつくっているような感覚を培っていくことが非常に重要です。例えば、公募によってロンドンのパブリックスペースを選定する、あるいは整備を支援する。1 本の木のようなものでも重要だとやっておられます。新しい市長は“Public space is the glue that holds a city together.” パブリックスペースは都市を 1 つに結びつけるのだとおっしゃっています。

最後に、知識社会にふさわしい都市空間とは何かを考えていく上で、パブリックスペースが非常に重要ではないかということです。セネットという社会学者が都市における Border の重要性を指摘しています。異なったものと異なったものが相互浸透していく。これが非常に大事で、ロンドンではかなり意識的にやったのではないかという話もあります。



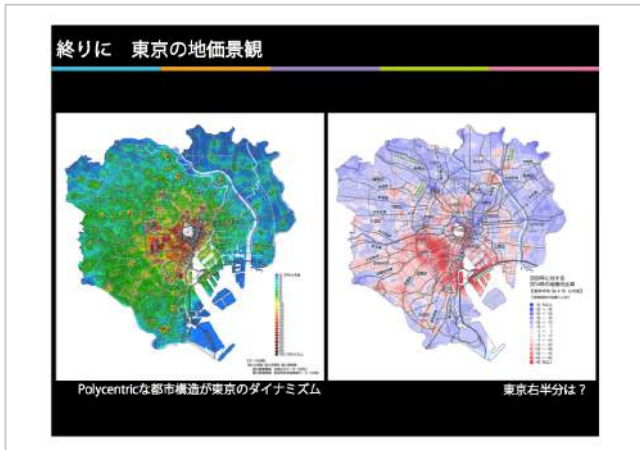
また、成熟都市はゼロ、無から有を生み出すというイノベーションもあるけれど、あるものをより良くしていくイノベーションが大事。そのためには、利用者の価値をどう埋め込んでいくのか。利用者の価値を埋め込んでエリアの価値が維持できれば再投資につながる。こういったサイクルにおいて、パブリックスペースの持つ意味は非常に大きいのではないかと。また、成熟都市を放っておくと衰退都市になってしまうので、通常の経済合理性を超えたような活動をどうやって結集していくのか。これをまちづくりにどうやって使っていくのかということ、1 つのキーワードがトライセクター・イノベーションです。3 つのセクター、ビジネス、パブリック、ソーシャル、この 3 つのセクターが一緒になったイノベーション。このようなイノベ

ーションを起こす場として、パブリックスペースに非常に意味がある。

まとめると、パブリックスペースは単に公共的な場所という以上に人々や知のネットワーク、あるいは境界を融合する場だということで、オリンピックに合わせて、あるいはポスト 2020 をにらんでパブリックスペースを整備していくことを、1 つのテーマとして掲げられるのではないかと考えています。そういう意味でロンドンのパクリと言われそうですが、TOKYO 100 PUBLIC SPACES のようなスローガンを掲げ、どうやって 100 のパブリックスペースを選び、整備していくのかを広く皆さんの参加を仰ぐ、オープンなワークショップの参加型プロセスを実践していけたらと思っています。今日の時点ではまだ準備ができていないのですが、近いうちにこういったことをオープンに検討していくような、SNS のようなものを検討している最中です。その結果、東京パイロット版として地方都市にもロールアウトしていきたいと思ひますし、国内外における緩やかなネットワークが構築できたらいいと思っています。



最後の図は今までの話とはあまり関係のない、私の趣味的な図で申し訳ありません。



左側は東京 23 区の 2014 年の地価を表しています。東京地価景観と書いていますが、赤いところが高く、青いところが安いとなっています。現在の地価の断面を見ていただくと、丸の内といった中心だけではなく、渋谷、池袋、新宿と、赤いところが幾つかある。ポリセントリック、モノセントリックではなく、東京の都市構造が多心型ポリセントリックになっている。これが東京のダイナミズムではないかと思ひます。

一方、右図の方は 2000 年と 2014 年の地価を比べ、東京都の平均的な地価上昇よりも上回って上昇した、発展したところは赤、それを下回っているところは青となっています。こちらで特徴的なのは臨海部や品川あたりが赤くなっていることです。昔の産業ゾーンだったところがポスト産業社会型の発展をしていると思ひます。残念ながら昔の下町というところは、やや低迷気味で、東京の中のパブリックスペースを考えていくときに、東京の右半分に着目してはどうかと思ひます。どうもありがとうございます。(拍手)



司会 中分先生、ありがとうございました。それでは、残りの時間でパネル・ディスカッションに入らせていただきたいと思ひます。

パネル・ディスカッションはファシリテーターを今村先生と斎藤先生のお 2 人をお願いし、パネリストの皆さまとディスカッションを進めていただきます。今村先生、宜しくお願い致します。



今村 それでは、始めたいと思ひます。本日の企画を準備し、充実した内容にしようと頑張ったところ、このようにあまりにも盛りだくさんになりました。

こうした企画にありがちな、最後のシンポジウムの時間があまりない状況です。会場の方も、すでに充分話を聞いたと思われるかもしれませんが、残された時間の中で議論をしたいと思ひます。

まずは私から幾つか質問をさせていただきたいと思ひます。第二部のプレゼンテーションの中で、オリンピックを契機にどう考えていくかという話がいろいろと出ました。

まず彦根さんに伺いたいのは、ロンドンのケースで Arup と行政（日本でいえば東京都や政府）との関係はどうであったのか。つまり、このところの状況で多々感じるもどかしさは、東京都もしくは政府がやっていることがなかなか我々に伝わってこないことからきて

います。ロンドンの際は、行政からの情報がどの程度 Arup に入っていたのか、もしくは市民にどう伝わっていたのか。

同じことを福島さんにもお聞きしたいと思います。福島さんのプレゼンテーションの冒頭のところで、アスリートの満足度、関係者の満足度、また一般市民の満足度という話がありました。今後一致団結して、みんなでオリンピックを盛り上げていこうというときに、どのような形で市民、もしくはスペシャリストが関わればいいのか、伺いたいと思います。

彦根さんにも、ご存知の範囲でということになるとと思いますが、Arup の関わり方、もしくは市民の関わりが、ロンドンのケースでわかることがあればお話しください。



彦根 かなり多角的に関わっていました。、2012年にオリンピックが終わって1年後の2013年。ちょうど東京がオリンピックの招致に成功したという辺りですが。

実は、オリンピックの設計等に関わった者たちを含めて Arup は一切そのことを言っはけない守秘義務契約がありました。

ようやく、2013年秋ごろに解禁となって、実際どういう作業をやり、どういうことに我々が関与したかをオープンにしてもいいよということになりました。Arup は、公表されています Zaha 設計のアクアテイクスの構造・設備設計、オリンピックパークの敷地全体の土壌改良、運河、橋梁の設計、人の流れの分析と園内の施設を繋ぐ動線設計などを行いました。

ODA では、先ほどのプレゼンの中にもありましたように、ソーシャルメディアを使っていろいろと操作したわけではないですが、国民なり市民を盛り立てようという事はずいぶんいろいろなことをやったようです。今日のプレゼンには入っていないのですが、反対する人に「オリンピックなんてやめて、別のことに金を使え」という落書きをあちこちに書かれた時期もずいぶんありました。それを何とかそうでない方向にもっていくには、メディアも含め、いろいろなことを考えていただいたようです。



今村 福島さんにはお聞きにくい質問ですが、いろいろ話したいことがあると伺っていますし、考えていることもおありだと思います。

いろいろな人を巻き込みたいとか。話せる範囲で、お

聞かせいただければと思います。



福島 盛り上げることにして組織的に取り組んでいるのは、IOC は「エンゲージメント」という言葉で表して取り組みを求めています。

エンゲージリングは婚約指輪のことですが、語源はそれと同じだそうです。観客や選手の経験、盛り上げるという日本語とぴったりではないですが、雰囲気をつくるというか、約束をするという意味合いを含んでいるようです。

また、海外から来られた方の印象にかなりの影響を与えるのは、ボランティアの存在だそうです。数のみならず質が決定的に重要といわれます。ボランティアは最低でも約 8 万人ぐらい必要といわれとありますが、ボランティアのできる人をどうやって育成していくかが課題です。オリンピックに何らかの形で関わりたいと考えている人がたくさんいることはうれしい限りですが、一口にボランティアといっても我々の通常概念とは少し違って、無償はだめだということのようです。つまり、何かしらの報酬を支払い、オリンピックに関わっているという意識というか、ロイヤリティーと言ったらいいでしょうか、こうした意識をもってもらうことが大事だということです。2012 ロンドン大会の経験者は講演会の機会に、有償にしません、そういう感覚・意識を持ってボランティアを育てなさい、と言っていました。

今そのことへの対応ですが、大学連携という取り組みを開始しています。日本に約 1000 の大学があるということですが、現在そのうち 750 校ぐらいの大学がオリンピックに何らかの関わりを持ちたい。ということで沖縄から北海道まで関係者が訪ねて、フリーのディスカッションをしています。その中ではやはり、ボランティアに関わりを持ちたいという意見が非常に多かったようです。頼もしい限りですが育成については相当大変な気がします。

別の見方です。長野での冬期オリンピックのときの 1 校 1 国運動がありました。冬のオリンピックですから出場国は少ないのですが、長野市近辺の学校がそれぞれ一校を一校がおもてなしをする。生徒さんにその国のことを勉強してもらい、選手と交流する取り組みのことです。今回も同じような形でできないかということです。選手村には 1 カ月前頃から入村することですが、その前から日本の暑さに慣れることもあって、国によっては数カ月前から日本に来るようです。ご承知のように九州の中津江がサッカーで有名になったように、今から招致活動、誘致活動に熱心な自治体もあります。こういうようなことも大事な取り組みか

なと思います。基準作りが課題です。

一方では、いろいろな企業から相談なり商売の挨拶をいただきます。トップパートナー、ゴールドパートナーとか、スポンサーとどういう関係を構築していくのかも重要です。これから実際に商品や資材・機材・機器などを調達していくことになります。

スポンサー企業に関しては実物で供給を受けるだけの選択肢ではありません。お金で支援を受けるというやり方もあります。組織委員会としては資金での寄付の方が望ましいと考えるのは致し方ないことです。

お答えになっていませんが、これから非常に盛り上げが大事だという中で、全国展開ですね。これは日本だけで終わってはいけなくて、日本以外にも広げなければいけないとも考えているところです。



今村 福島さんは組織委員会の会場整備局長ですが、今日お集まりの多くの方は建築、建設関係の方だと思います。

整備局長の仕事という、スタジアム、オリンピックと関連した建物、以前の高速道路のようなインフラをつくる、というようにハードの話がメインだと思うでしょうが、実はそうではないようです。IOCの方針にもあるように新規の施設建設は最近ではほとんどなくなって、会場整備が大変なことは、ボランティアの手配やテロ対策など、どちらかというとソフトのことの重要性が増していると感じています。

しかも、ハードをつくることはもちろん課題ではあるもののある程度これまでの経験があり、一方で、ソフトを作ることや、ソーシャルネットを使うことは前例がないことなので、まさに手探りでやっている。そのような話を以前伺ったのですが、少しお話しいただきたいと思います。

また、日建設計の中分さんに話していただきたいのは、今日のプレゼンテーションでは、このメンバーの中で日建設計さんが入り 2020 年について語るといって、日本最大の建築設計組織が超高層をボンボンつくるか、そういう話が出るかと思ったら、そうではなく、都市に空間をつくる話しをされました。しかも、プレゼンテーションの前半はほとんどソフトの話であり、話がハードからソフトに移っている印象が強かったと思います。

その2つを兼ね、福島様と中分さんに、お話を一言ずついただけますでしょうか。



福島 今回の東京大会では、ハードでのレガシーはあまり多くありません。本日お集まりの皆さま方の多くは建設関連とお見受けしています。

冷水をかけるような言い方で申し訳ないのですが、正直言って建物・施設の整備については、都知事もできる限り最小限に抑えて、税金の使途に非常に神経をとがらせています。都民感覚的にはそのとうりだと思いますし、そういった発言が随所に見られます。

オリンピック固有の、たとえば建物を飾るとか、照明でいうと 8K の撮影に頼るために、この何倍もの照明を付け替えなくてはならないとか、メディアのためのコンパウンドとか、非常用電源設備の設置などのいわゆるオーバーレイがあります。これらへの費用も結構かさみます。それが大会後どういう使われ方をするのは、大きな問題であり、あらかじめ取り決めごとにしておくことで仮施設をつくっていくことができると考えています。

サウテナビリティも重要です。持続可能な社会です。まだ具体の取り組みが見えない中で時間ばかりが過ぎて結構追い詰められそうな気がします。IOCからは環境の ISO や、CASBEE 対応も求めてきています。今の時点で警備もサイバーセキュリティ以外に、いろいろなテロに対し建物を警備しやすいものにして星、とも言っています。未知の部分がありますが、これから会場の皆さんにいろいろな場面で教えていただかないと大変かな、と思っています。



中分 2点申し上げます。一点目は、日本の設計事務所という立場から考えると、日本の都市を持続的に魅力のある、暮らしやすい場所に変えていく。

あるいは、知的な生産性の高い場所に変えていくことが重要ではないかと思っています。そこに我々も、活動の領域の1分野を見いだしたいと思っています。

そのときには当然、設計事務所がこう考えたから、こうした方がいいのではないですか、というような提案ではカバーできないので、福島さんの話にもエンゲージメントという話がありました。社会的にはパブリックセクター、ビジネスセクターとソーシャルセクターの3つがエンゲージし、コミットしていく中で、日本のパブリックスペースがオリンピックを契機として良いものにしていけないかというのが1つ。

もう1つは、日本の中で国内仕事が減っていくとなると、どうしても海外に打って出なければいけないと

ということになります。そのときにオリンピックにきた外国人が、東京に来てがっかりして帰ったとなると、決定的にマイナスです。下世話な話で恐縮ですが、我々がアジアとかで営業活動をしていて、アメリカの事務所、ヨーロッパの事務所とアジアの事務所の3地域の事務所によるコンペになるわけです。アメリカにしたらどうか、ヨーロッパにしたらどうか、アジアの提案も聞いてみたい、というように。アジアでは今のところ、日本、東京が無条件に選ばれているわけですが、2020年の東京オリンピックでもって、東京に対する期待感や評価を上げられるのか、それがだめになるのか。それは我々のビジネス的に、かなり死活問題だということがあります。

ですから、市民として、あるいは企業の公的な立場として、という意味でのパブリックスペースの整備も重要だし、卑近なところでは海外で戦っていくために、東京側のパブリックスペースが充実してもらわなくては困ると考えている次第です。

当初の予定だと、本日、ソーシャルメディアを使って「皆さん、ここに意見を寄せてください」というような話になるはずですが、炎上問題とかいろいろあり、そういうものを運営したことのない人間が本当にうまくやっていけるのだろうかというような検討をしています。多少、準備に時間がかかっている状況です。もしオープンしましたら、今日の皆さんにも、是非ご参加いただけるといいなと思っています。



斎藤 なかなか難しいシンポジウムなので、今村さんに少し会場からコメントなり質疑をやってもらったらどうかと、先ほど提案しました。

いや、シンポジウムではパネラー同士が真剣にやるのが、まずは大事だ。あとは懇親会で十分やるのだという話です(笑)。簡単な質問やコメントも含めてですが、中分さんの成熟都市の話は大変面白いし、いろいろな方々がリンクージュも含めてファイバーシティのようなものを提案しています。

新国立のこれだけのレガシーを考えると、中分さんの新国立のレガシーはどんなか。感想なり、一言コメント頂けますか。



中分 東京は展示も含め、たくさんの人を集めるイベントスペースは、決定的に不足していると思います。

例えば、ICT関係の展示会は、臨海副都心では狭すぎるというので中国に行ってしまう。やはり、東京に多数の人を集められる、国際的なイベントのできるイベント施設があることは、私は不可欠ではないかと思っています。

すみません。デザイン的な問題をスルッとすり抜けていました。今日、弊社の設計担当者人間も来ているので、懇親会のほうには参加するはずですから、ぜひそちらをつかまえて、皆さん議論いただければと思います。



斎藤 それでは福島さんに伺います。いわゆるレガシーを考えると、東京都も幾つかのプロジェクトを進めようとしているとお聞きました。

例えば、ロンドンオリンピックのザハがやったのを見ると、非常に巨大な座席をつくっておき、それを取り外してオリンピック中はちょっと我慢した雰囲気でもやるのも1つの手だと思います。

一方でやはり、維持管理などを考えると、座席を取ったということだけではなく、空間のボリュームそのものを変えることによりレガシーを考えることも、将来的には日本のメッセージとしては非常に興味があります。そういうイノベティブというか、前向きな提案は東京都としてはどうなのか。受けられるのか、そんな余分なことはするなというのか、どうでしょうか。



福島 東京都が恒設で整備をします。恒設で50年、100年もたせるということで、いま設計に取りましたアクアティクスセンターですね。

水に関する競技、それからバレーボールの有明アリーナ。こういう全天候型の施設は現在基本設計中ですが、大会終了後座席は減少させると言っています。ただし、構造躯体はそのままのようですので、空間のボリュームは変わらないということのようです。それを具体的にどう利用していくかということ、去年からいろいろなアドバイザーからも意見を聞いているところです。

東京都の恒設施設は、後利用の具体策の提案を公募しているところです。そういうことなので、いま先生のご質問の全天候型と、私どもが仮設としてつくる競技団体は最低でも5000です。日本で人気があり、あるいは欧米でも特に米国で人気があるといった競技は、たとえばバスケットは2万人、彼らはもっと人を集められるといっています。バスケットボールさいたまスーパーアリーナを考えていますが、2万で全天候型は

首都圏ではあそこぐらいしかない。そうでないと新たにつくらなければいけない。

仮設でもビーチバレーも1万3000席や4000は欲しい。これは全天候型ではないので、全部終わったら取り壊します。しかし、そこをそのままオリンピック施設として残していく場合であってもスタンドはほとんど解体します。そういう施設をつくったその場所を何らかの形でレガシーとしていくことになるのだらうと思います。



斎藤 最後は彦根さんに。今日は大変難しいテーマで、プレゼンテーションではロンドンの話にならざるを得なかったと思います。

リアルな質問は難しいとは思いますが、いずれオリンピックが成功裏に終わった時点では、いま議論しているようなことが総括されるでしょう。どんなことがあったかが明らかになると思っています。

1つだけ、もし聞かせられたらと思うのは、先ほど例に出した国際フォーラムや横浜大さん橋は、いずれもコンペのときには Arup が基本構想に参画したやに聞いています。しかし実際の設計のときには参画できなかった。日本の仕組みの中で良い作品が無事できたことは良かったのですが、今回のザハさんは、我々としてはなじみのない建築家であるし、国際的な評価もさることながら、その仕事の仕方等も日本の仕組みの中で難しかったと思います。

そういうときに Arup のロンドンがもう少し通訳代わりに入ってくると、設計の流れが少し違ったのかなというイメージもあります。大変難しい質問かもしれませんが、その辺を。要するに、これから日本が国際化したときに、外の人たちと組むときにどのようにやればいいのかの教訓というか。失敗したわけではないので、まだこれからですが、何かコメントをいただければありがたいと思います。



彦根 すいぶん難しいですね。実際、ザハがコンペに出たときは、Arup のロンドン事務所がかなり協力して案をつくり、ああいう形で選ばれました。

構造設計、設備設計、ポールの観客席の設計、ライティング、音響など、諸々の協力です。もともとのコンペ要項からいってザハは設計者にはなることができませんでした。もしザハ事務所が中心となって設計をまとめるような体制であれば、Arup のロンドン事務所

が当初からの協力者ですので、設計に参加した可能性は十分にあります。それは、仰る通り、異なった状況になったと思います。

あとは、はじめに JSC さんも我々設計 JV もザハ事務所と協議し、設計をどうやって進めるかという話をすいぶんしました、日本の設計チームがすいぶん頼もしく見られたようです。当然、彼らは主義主張のある設計者ですが、それに対してもしっかりと対応できる体制なり、能力があると見られたのです。そのため、Arup ロンドン事務所が設計に関わる事がなかったのです。というところで頑張ってずっと一緒にやってきた。形がいろいろ変わったのも、これは海外の雑誌等にインタビュー記事が出ていますが、ザハのパートナーが言っています。きちんと設計に関与して、変更に対しコストに関わることも理解した上で設計 JV と一緒に縮小案を設計しているのだと。



今村 すみません時間がオーバーしました。続きはウェブではなく懇親会でという形にさせていただきたいと思います。

最後に斎藤先生から、元気が出るまとめの一言をお願いできますか。



斎藤 とにかく金曜日の大事な3時からの時間に、現役の人を含めてかくも多くの方々に集まっていただきました。

aaca とは、こんなすごいグループなのかと感心しました。透明性のある議論はすごく大事だと思います。まだまだ時間はあると思うので、ぜひ皆さんの力を集結して議論を深めたい。ということは、日本がこの時期、世界に対しても何ができるかということを示せばいいなと思っています。今日はありがとうございました。(拍手)

司会 パネリストの彦根先生、福島先生、中分先生、ファシリテーターの今村先生、斎藤先生、大変ありがとうございました。

それでは、いま一度、盛大な拍手を皆さまにお送りいただきたいと思います。これにて2015年 aaca 景観シンポジウムを、滞りなく閉演といたします。

(了)

発行 2015年10月1日

発行者 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
<http://www.aacajp.com>

〒108-0014

東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階

tel 03-3457-7998

fax 03-3457-1598

e-mail info@aacajp.com

この記録は当日使用された画像および収録された
音声テープ並びに配布された資料から編集された
ものです。

無断転載を禁じます。